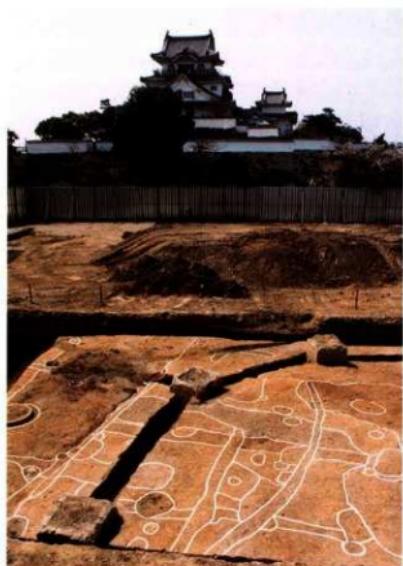


岸 和 田 城 跡

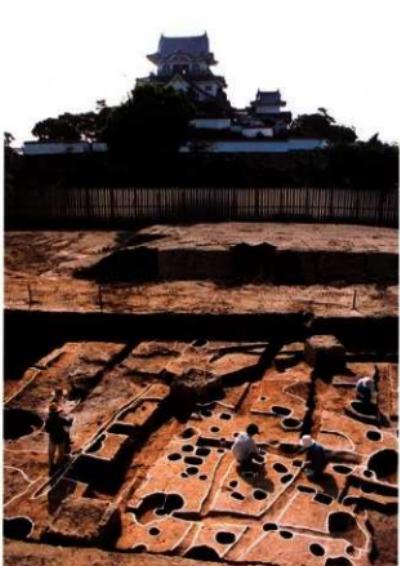
—東の二の丸の調査—

2002年3月

大阪府教育委員会



1. 遺構検出状況（東から） 4月10日撮影



2. 遺構完掘状況 6月28日撮影



3. 鐵造土坑 II b-1 発見遺物（撮影 出水伯明）

岸 和 田 城 跡

—東の二の丸の調査—

2002年3月

大阪府教育委員会

はしがき

大阪と和歌山を結ぶ紀州街道の要衝の地に位置する岸和田城は大坂城・高槻城と並んで天守閣と近世城郭の大規模な石垣をもつ大阪府内の三大城の一つです。

天正十三年（1585）、秀吉は根来・雜賀の一揆を討った後、岸和田城に恩顧の家臣小出秀政を配置しました。はじめ四千石で入城した秀政は文禄三年（1594）一万石に、翌年には三万石に加増され、城郭の整備を本格的に行い、天守閣を造営します。その間、和泉では太閤検地が実施され、岸和田藩の基礎はこの頃に確立されたのです。

大坂の陣後、小出氏に代わって譜代大名松平氏が、寛永十七年（1640）には岡部宣勝が城主となり、廃藩置県にいたるまで十三代、約230年にわたる統治が続きます。譜代大名としての岡部氏は朝鮮通信使接待役、日光東照宮への代参、遠江国相良城請取など、重要な役を務めましたが長命で永く奉公し、幕府の要職に至った城主は出ませんでした。

今回調査区は本丸の東側、二の丸の中核部分で岡部氏の時代には筆頭家老中家の屋敷跡として絵図などで知られる部分でした。残念ながら、江戸時代の大半の遺構は府立岸和田高等学校建設によって削平されていました。しかし、小出氏の時代の遺構は良好に残されており、鉄製品を大量に製作していた痕跡は大坂の陣前後の緊迫した状況を推測させるものでした。これらは岸和田城を知る上で重要な資料を提示するのみならず、戦国時代の歴史像を語る上にも新たな1ページを加えることと確信します。

末筆ながら、調査にあたりご協力頂いた地元関係各位、中家・小出家末裔の方々はじめ、岸和田市教育委員会・府立岸和田高等学校に深く感謝の意を表しますとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご協力とご理解をいただきますことをお願いする次第です。

平成14年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例　言

1. 本書は、府立岸和田高等学校建て替えに伴う岸和田城跡発掘調査報告書である。調査は大阪府教育委員会施設課から依頼を受け、文化財保護課が実施した。
2. 現地調査は文化財保護課調査第二グループ技師、西川寿勝を担当者として、平成13年3月に開始し、7月末に終了した。整理作業は現地調査と並行して行い、平成14年3月末に事業を終了した。その間、6月に現地説明会を実施、発見遺物の一部を12月から約2ヶ月にわたって府立泉北考古資料館で速報展示し、普及と活用に努めた。
3. 本書の執筆・編集は西川が中心に行い、一部は渡辺晴香（本府調査員）による。また、岸和田市教育委員会郷土史資料室、市立郷土資料館学芸員山中吾朗氏より玉稿を賜った。
4. 本文・挿図に用いた標高は東京湾標準潮位（T. P. 値）を、座標値は国土座標第VI系によるもので、方位は座標北を示す。
5. 本調査に伴う基準点測量は（株）ウエスコに、遺物の写真撮影は（有）阿南写真工房に委託して実施した。
6. 発掘調査・遺物整理及び本書作成に要した経費は全額大阪府教育委員会施設課が負担した。
7. 現地調査、報告書作成にあたって、以下の方々からご指導、ご助言、ご協力を得ました。記して感謝致します（五十音順 敬称略）。

赤松和佳 五十川伸矢 伊藤浩司 池田研 今井典子 魚津知克 大西穂子 岡田清一 川口宏海 河野一隆 川村（中）登美子 川村紀子 久保智康 黒田慶一 近藤康司 佐久間貴士 萩田圭子 嶋谷和彦 鈴木重治 千田嘉博 横山洋 鳥居信子 中井均 永井正浩 平田洋司 鹿丁道明 松尾信裕 豆谷浩之 南秀雄 宮本康治 村上伸之 村木二郎 森毅 山田正克 山中吾朗 岸和田市教育委員会 大阪府立岸和田高等学校

目 次

はしがき 例言・目次

第Ⅰ章 調査計画	1. 調査経緯	(西川)	1
	2. 調査位置と調査方法	(西川)	1
	3. 基本層序	(西川)	3
第Ⅱ章 岸和田城略史	1. 地理的環境	(西川)	4
	2. 歴史的環境	(西川)	4
第Ⅲ章 発掘調査	1. はじめに	(西川・渡辺)	9
	2. I期の遺構	(西川)	9
	3. I期の遺物	(渡辺)	14
	4. IIa期の遺構	(西川)	16
	5. IIa期の遺物	(渡辺)	16
	6. IIb期の遺構	(西川)	18
	7. IIb期の遺物	(渡辺)	18
	8. III期の遺構	(西川)	24
	9. III期の遺物	(渡辺)	24
第Ⅳ章 まとめ		(西川・渡辺)	30
付載1	岸和田藩筆頭家老中家の系譜	(山中)	33
付載2	唐津焼の年代観—岸和田城鍛造土坑II b-1出土資料をめぐって—	(渡辺)	37
実測遺物登録対照表・抄録		(渡辺)	38

挿 図 目 次

図1 岸和田城城郭復元図	2	図4 小出一族系図と関ヶ原合戦進軍図	… 5
図2 調査区位置図	3	図5 大坂の陣進軍図	… 7
図3 岸和田城復元変遷図	4	図6 岸和田城図(延宝三年 1675)	… 8

図 7 遺構全体図及び上層図 (1/120) 10	図 17 錫造土坑 II b-1 平面及び断面図 (1/80) 20
図 8 I 期の遺構 (1/80) 11	図 18 II b 期の遺物 (1) 21
図 9 I 期の遺構平面及び断面図 (1/20) 12	図 19 II b 期の遺物 (2) 22
図 10 I 期の遺物 (1) 13	図 20 II b 期の遺物 (3) 23
図 11 I 期の遺物 (2) 13	図 21 III 期の遺構 (1/120) 25
図 12 I 期の遺物 (3) 14	図 22 III 期の遺物 (1) 27
図 13 I 期の遺物 (4) 15	図 23 III 期の遺物 (2) 28
図 14 II a 期の遺物 16	図 24 III 期の遺物 (3) 29
図 15 II a 期の遺構 (1/80) 17	図 25 中家系図 33
図 16 II b 期の遺構 (1/80) 19	図 26 岡部・原・久野氏略系図 (『尊卑分脈』より) 35
 表 1 岸和田城関連年表 32	表 3 実測遺物登録対照表 2 39
表 2 実測遺物登録対照表 1 38	抄録 40

図 版 目 次

巻頭図版 造構状況及び鍛造土坑 II b-1 発見遺物

図版とびら 井戸 III-1 の井戸枠展開状況	図版 8 鍛造土坑 II b-1 調査状況 (3)
図版 1 再建された天守閣と現地説明会状況	図版 9 中家所蔵系図 (A)
図版 2 発見遺構全景	図版 10 中家所蔵系図 (B)
図版 3 発掘調査状況	図版 11 I・II a 期の遺物
図版 4 I・III 期の遺構	図版 12 鍛造土坑 II b-1 発見遺物 (1)
図版 5 II a 期の遺構	図版 13 鍛造土坑 II b-1 発見遺物 (2)
図版 6 鍛造土坑 II b-1 調査状況 (1)	図版 14 III 期の遺物
図版 7 鍛造土坑 II b-1 調査状況 (2)	図版 15 土坑 III-1 発見遺物



1. 鍛造土坑 II b-1 上面発見銅錢 (実大) と至道元寶 (2.草書体・3.行書体・4.楷書体)

第Ⅰ章 調査計画

1. 調査経緯

岸和田城は泉州のほぼ中央、大阪湾を望む海浜部に位置する。大坂城・高槻城とならんで大阪三大城の一つである。岸和田は「岸」と呼ばれる港湾に、泉州を治める楠木正成によって派遣された和田高家が城を築いたことによるとされる。中世末には、泉南から紀州に勢力を伸ばす根来・雜賀・粉河を攻撃する前線基地として信長・秀吉などが来城し、根来寺焼き打ちなどを行っている。江戸時代の岸和田城は御三家の一つである紀州藩を見据え、幕藩体制に密接な関わりをもっていたとも考えられている。しかし、城に関する研究は途に着いたばかりで発掘調査も行われていなかった（図1）。

本府教育委員会では、府立岸和田高等学校建て替えに伴って1995年（一次調査）と2001年（二次調査）に東の二の丸の発掘調査を実施した。調査地は正保二年（1645年）の和泉岸和田城絵図による筆頭家老中家屋敷地の中心部分に該当することがほぼ確かめられ、廃藩置県後は岸和田高等学校の運動場として整地されていたことも知られる。戦後、高等学校は運動場の西側に建設されていた木造校舎を撤去して運動場にし、かわりに調査地周辺を鉄筋建て校舎とした。本府教育委員会による発掘調査はこれらの鉄筋校舎建て替えに伴って、遺構の残存する部分を中心に行うこととなった。

一次調査は2000m²、家老屋敷地と外堀部分にあたる。四階建て鉄筋コンクリートの校舎及び電気設備室などの建設に伴うものである。97年には発掘調査概要報告書が刊行されている。

二次調査は同屋敷地中心部分の約300m²である。上記の建物に取りつく校舎建設に伴うものである。ただし、建設予定地の主な部分は既存建物の基礎によって破壊されていることが撤去工事の立ち会いなどで判明していた。したがって、実際の調査は建物基礎部分による破壊が少ない部分を抽出して行うこととなり、調査面積は大幅に縮小されることとなった。

調査の結果、中世末から近世に至る多様な遺構・遺物が発見された。以上については各調査の終了段階に報道提供・現地説明会を実施し、約500名の参集を得た（図版1c-d）。そして、二次調査成果の一部は2001年に京都府園部町立郷土資料館秋期特別展「小出吉親」に出展され、同年暮れには府立泉北考古資料館でも速報展示を行った。二次調査中、中家末裔である川村登美子氏のご協力により、中家系図（図版9・10）や中家に伝わる陶磁器などを観察する機会を得た。詳細は付載1（P 33）に譲る。酷暑の折、外業調査の補助に以下の方々の協力を得た（敬称略・五十音順）。池上悦子・久米真紀子・長尾美代子・星川尚志・山脇恵子。

2. 調査位置と調査方法

本府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できる様に大阪府発行1/10000地形図を基準として、四段階区分する表記法を探っている



図1 岸和田城城郭復元図

(図2)。第Ⅰ区画は南西隅を基準として、南北をA～O・東西を0～8に区分する。岸和田城跡はD 3区内にある。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので、南北1500 m、東西2000 mの範囲である。岸和田城は8区内にある。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100 m方眼で区画し、北東隅を基準として南北をA～O・東西を1～20に区分したもののである。今回調査区は16 B区内にある。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を更に10 m方眼で100等分したもので、北東を基点に南北をa～j・東西を1～10で表記している。以上より、今回調査区はD 3-8-16 B-5 hなどと表記できる。なお、遺物包含層から発見された陶磁器などは調査区の中央杭より四等分して取り上げ、その他の遺物は整地土層と遺構に帰属する形で取り上げた。

3. 基本層序

今回調査地は地山（暗茶褐色粘土・暗褐砂）上に幾層かの整地土層が盛られる形がみられた。整地土層は1～2 cmの黄灰粘土層の上下で分けられる（図7）。この層は一次調査でも発見されており、屋敷地を整備する仕上げに敷きつめられたと推測している。その下層整地土層（暗灰茶褐色土）には遺物が含まれず、東側に低い地形を平坦化するため、城郭整備段階に堀を掘った土などによって盛られたと考える。一次調査では0.7 m近くの堆積が見られたところもあった。上層整地土層（灰褐色砂・暗灰粘土）は江戸時代にくだると考える。これまでの調査ではほとんど面的に残されていない。

地山は古城川の氾濫による河川堆積物と考える。粘土部分と粗砂・微砂が互層に堆積する部分が見られ、少量の瓦器が含まれていた。その他、遺構面より奈良時代の須恵器・白磁碗なども発見されている（図10）。

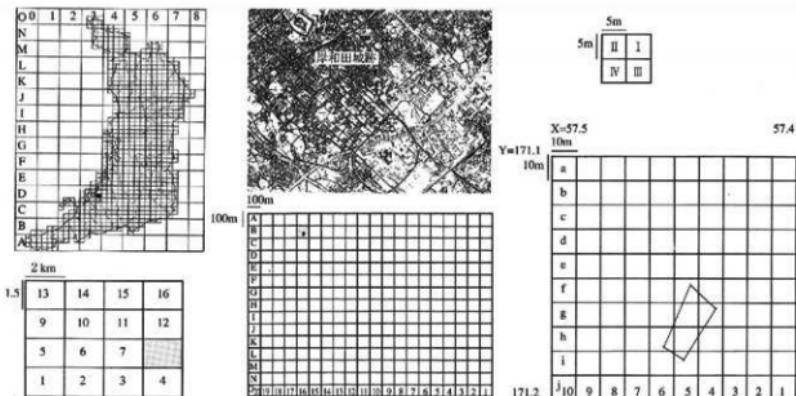


図2 調査区位置図

第Ⅱ章 岸和田城略史

1. 地理的環境

岸和田城は東南に高くなる和泉丘陵の段丘裾から、西に大阪湾を望む海岸砂丘との変化点に位置する。城郭は紀州街道の東側にひろがる。当初は海岸線が紀州街道の西側にせまっていたが、江戸時代になって次第に海退し、街道の西側に城下町が発達、現在も市街地化している。段丘からはいく筋のか小河川が流れ、海岸との間に扇状地が形成された様だ。城の東から北に北上して古城川が流れる。この川を外堀に取り込み、防御と排水の調整がなされている。もともと、古城川はほぼ真西に向かった流路だったのだろう。紀州街道に沿った条里制区画によって水路が制御され、さらに近世城郭の整備によって流路を北上させたのだろう。大雨には氾濫したらしく、地山段丘上に厚い河川堆積物がみられた（図3a）。

2. 歴史的環境

岸和田城の歴史は南北朝時代から現代にいたるが、本節では主な調査成果に対応する時期として、小出一族の活躍した戦国時代末期を中心に概観する。

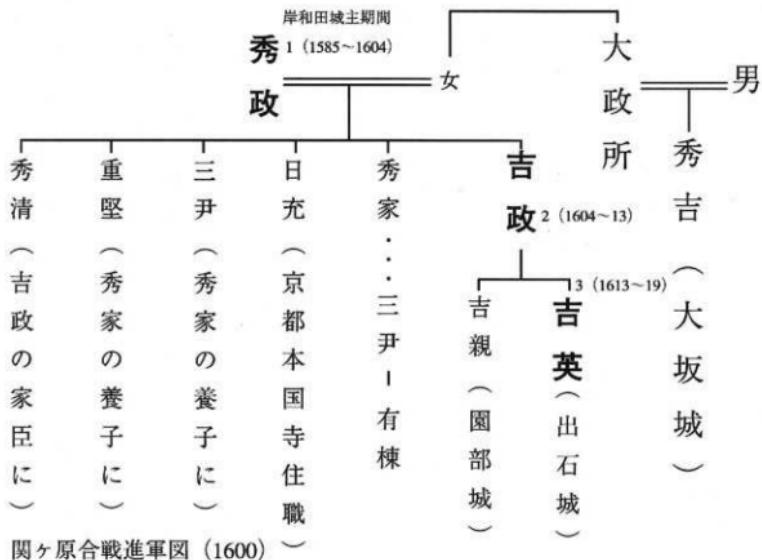
前章に示した様に、秀吉は根来・難賀攻めの拠点として岸和田城に入り、1585年に根来寺焼き打ちを行い、隣接する貝塚から紀北に及ぶ砦・出城を陥落させた。そして、和歌山城を整備し、岸和田城の機能を移転させている。この時期の城郭は明瞭でないものの、現在の西の二の丸を本丸として、南に鎧形の馬出しを備えていた様で、その痕跡を今に伝える（図3a）。

根来攻めの決着とともに、秀吉恩顧の家臣小出秀政が入封する。小出秀政は秀吉にとって、母（大政所）の妹を正妻にする叔父だった（図4上）。朝鮮への派兵も免除されている。そして、石垣で囲い天守閣を備えた近世城郭としての平城に整備する。それは西の二の丸の東側に内堀をめぐらせる本丸と天守閣を造営し、これを覆う様に二の丸、三の丸をめぐらせるものだった（図3b）。しかし、城郭整備の完成まもなく秀吉は逝去し、再び激動の時代がおとずれる。

岸和田城の拡張は、もともと付近に存在した条里制地割りに沿って行われた可能性が高い。ま



図3 岸和田城復元変遷図 (1/20000)



関ヶ原合戦進軍図 (1600)

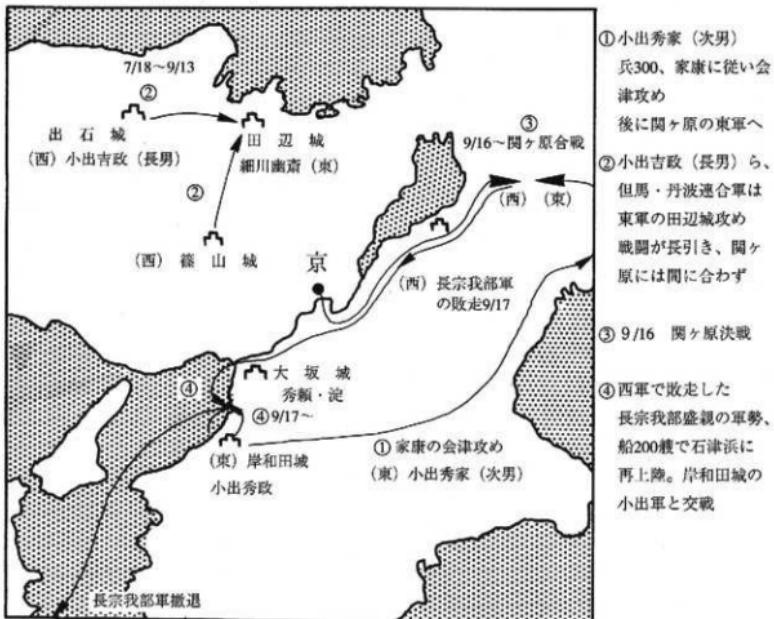


図4 小出一族系図と闇ヶ原合戦進軍図

た、近年内堀石垣の崩落と共に大量の一石五輪塔が発見されており、領国内の寺院・墓地から、徵發されたと考える。付近に寺院があったかもしだい。

小出氏による城郭の整備は1595年の天守閣着工記事と、三年後の竣工記事が知られるのみで詳細はわからない。しかし、天守閣の完成に伴って、内堀・外堀の掘削や櫓・門などの防衛施設も同時に整備されたことは間違いないだろう。それは大坂城惣構えの造営と連動しており、関連が推測される。

さて、秀吉の死とともに家臣の分裂が始まり、それはわが国最大の合戦へと連動する。関ヶ原合戦→大坂冬・夏の陣に至る動きである。関ヶ原合戦では、関西諸国の武将は中立か西軍に加担するものが多いなか、岸和田城の小出秀政は次男の秀家（300余兵）を家康と共に会津攻めに向わせ、そのまま東軍陣地に布陣させている（図4下）。その一方、但馬国の出石城主だった長男吉政には西軍に加勢させ、東軍についた細川幽斎の山辺城を攻撃させる。この戦いが長期化し、吉政の西軍は関ヶ原合戦に間に合わず、運よく兄弟対決とはならなかった。そして、西軍が敗退すると同時に、岸和田城の秀政は高知に逃げ帰る長宗我部盛親の水軍を石津（堺市西南～高石市にかけての海岸）で追撃している。

1604年に小出秀政が没し、出石城から長男吉政が入封して岸和田城主となる。1613年には吉政も没し、同じく出石城から長男吉英が転封し城主となる。そして、翌14年に大坂冬の陣が勃発、小出一族は窮地に立たされる。

この難に吉英は大坂方に味方せず、一触即発の危機にさらされる（図5上）。大坂方は大野治胤・横島玄蕃らの軍が泉州に南下、堺を焼き打ちする。堺政所の長官は岸和田城に逃げ込んでくる。小出軍が静観していると、大坂方を見限った摂津茨木城の片桐且元の軍が堺湊から上陸し抗戦、多くの犠牲を出す激戦となる。この間に家康の軍が続々到着し、大野・横島の軍は大坂城へと撤兵し、岸和田城は難をかうじて逃れる。

ただし、籠城をきめた大坂城に向け、小出軍は35000兵のほぼ全勢力を投入させられる。岸和田城は家康家臣團に留守居され、小出軍は東総大將真田幸安（幸村の長男）5000騎と大坂城平野口の門をはさんで対峙することとなる。ところが、この事態も秀頼と家康の講和によって回避されたのである。

翌、15年の大坂夏の陣では岸和田城まで大坂方の軍勢がいち早く進軍している（図5下）。進撃したのは冬の陣同様、大野治胤・横島玄蕃らの軍で、住吉・堺を焼き打ちし、4月28日にはついに岸和田城を包囲してしまう。

この知らせに和歌山城から浅野長晟の軍が北上し、大坂方の軍も本隊は和歌山へ向けて南下する。そして、泉佐野の樺井川で両軍は衝突し、夏の陣の初戦が開始されたのである。しかし、功を焦った大坂方は数時間で惨敗、退却となる。浅野軍も深追いせずに撤退したため、包囲をとかけられた岸和田城の小出勢が大坂方を追撃し、32の首級と6人を生け捕りにする多大な戦果を挙げることになる。また、夏の陣の決戦となった5月6・7日には岸和田方面に落ちてきた大坂方の武

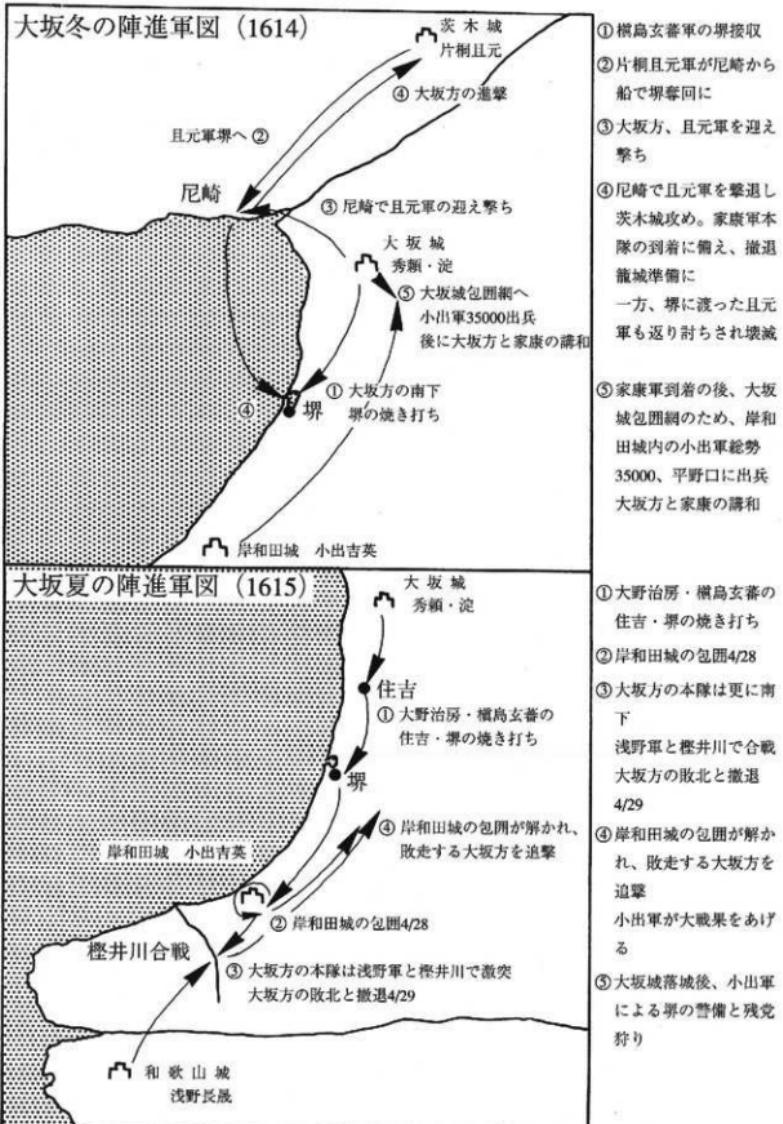


図5 大坂の陣進軍図

将を討ち取り、その首級は184にのぼることが記されている。

この様にして、運よく戦乱の時代を切り抜けた小出一族も城主の長男吉英が1619年に岸和田から出石に転封となり、次男吉親も出石城から園部城に移っている。

岸和田城はその後、松平康重が城主となる。その家臣石川正西の手記によると「先城主小出大和守殿、普請これ無き故、門もへいも大破の由…。」と、城内の荒れ果てた様子を記録している。

最終的に、松平から岡部へ岸和田城は引き継がれ、今日の城郭形態と城下町の広がりへ発展していった。1645年に幕府の命を受けて描かれた「和泉国岸和田城絵図」や1675年の「岸和田城図」(図6)をみると、城門や城下町が大坂側に拡充され、紀州側より発展していることが読み取れる。戦乱後に素早く再興された堺・大坂城下町との活発な交流が看取できる。

ただし、江戸時代を通じて岡部氏の治める岸和田藩は財政が苦しく、1827年に落雷で消失した天守閣はついに再建出来なかった。現在見られる天守閣は戦後、市民の手によって復興されたものである(図版1a・2a)。

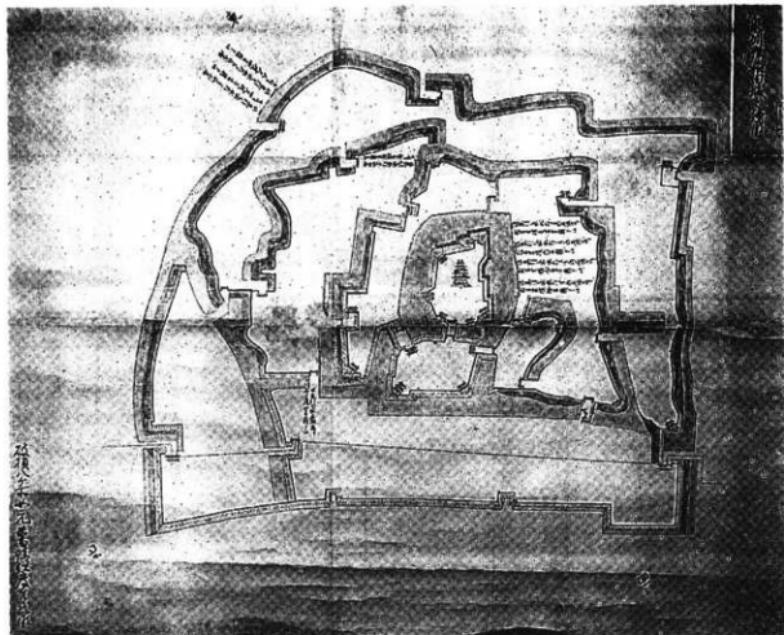


図6 岸和田城図（延宝三年・1675）府立岸和田高等学校蔵

第Ⅲ章 発掘調査

1. はじめに

調査地は地山上に幾層かの整地上層が形成されていた。整地土層は地山深層の砂礫を多く含むもの（灰褐色・暗灰粘土）、地山表層の粘土や微砂によって構成されるもの（暗灰茶褐色土）などがあった。整地土層には遺物がほとんど含まれなかつたが、調査地の東西にある内堀・外堀の掘削土を盛り上げたものと推測する。つまり、小出秀政による近世城郭築城期（1595～1597）に基盤が形成されたと考える。このうち、鍵となる整地土層（黄灰粘土）の上下からの切り込みによって、遺構は三時期に大別できる。

I期は整地土層の下層から発見された遺構である。したがって、1595年の城郭造営以前の遺構と考える。II期は整地土層を切り込んで形成された遺構である。この時期の遺構は切り合い関係と焼土・炭などを含む埋め土の状況から、更にIIa・IIb期に細分した。もっとも新しい遺構鍛造土坑IIb-1から発見された陶磁器や瓦は1620年以降のものを含んでいなかった。したがって、II期の形成年代は岸和田城で小出一族が活躍した1595～1620年頃と推測する。

III期はそれ以降、府立高校の校舎などが建設されるまでである。ただし、この時期の遺構は明瞭に残されておらず、II期の遺構と同一面で検出されるものもあった。これらは家老屋敷撤去や外掘りの埋め戻しによって江戸時代の地表面が削平された後に形成されたものと考える。

2. I期の遺構（図8・9 図版4）

調査区を覆う薄い整地上層の下面から発見された遺構群である。小規模な土坑を中心となる。整地土I-1～4は土質などから判別したが、層境は明瞭でなく厚みも一定でない。整地土I-1は調査区に4本のたちわりトレンチを設定し、堆積状況を確認しながら掘削した。概して、東側が薄く、旧地形を平坦化する目的で敷きつめられた様だ。整地土I-2は灰白色の砂利によっており、低いところを平坦化するためのものだろう。整地土I-3は上層遺構の切り込みなどが激しく、明瞭でない。前節に示した鍵となる整地土層（黄灰粘土）を含むものである。

土坑I-1は調査区の東端で発見された。南北約0.7m、東西0.8m以上を測り、掘り底は平坦である。埋め土の中程に瓦・礫と共に漆焼人甕、青磁碗などが発見された。

土坑I-2は土坑I-1の北西で発見され、直径約0.6mのすり鉢形を示す。上面は焼土遺構II-a-1によって削られる。掘り底に瓦・焼土などと共に焼けた漆焼大甕が発見された。もともと、大甕が据えられていたものが破壊され、焼土遺構IIa-1が形成されたと考える。

土坑I-3は土坑I-1の北で発見された。直径約0.5mの掘り込み中に曲物が据えられていた。上面は整地土I-4によって削られる。掘り底に高さ5cm程度の曲げ物痕跡が残されていた。内部は暗茶褐色粗砂が充填していた。

土坑I-4は土坑I-3の南東に接して発見された。直径約1mの不定形な掘り込み中に漆焼大

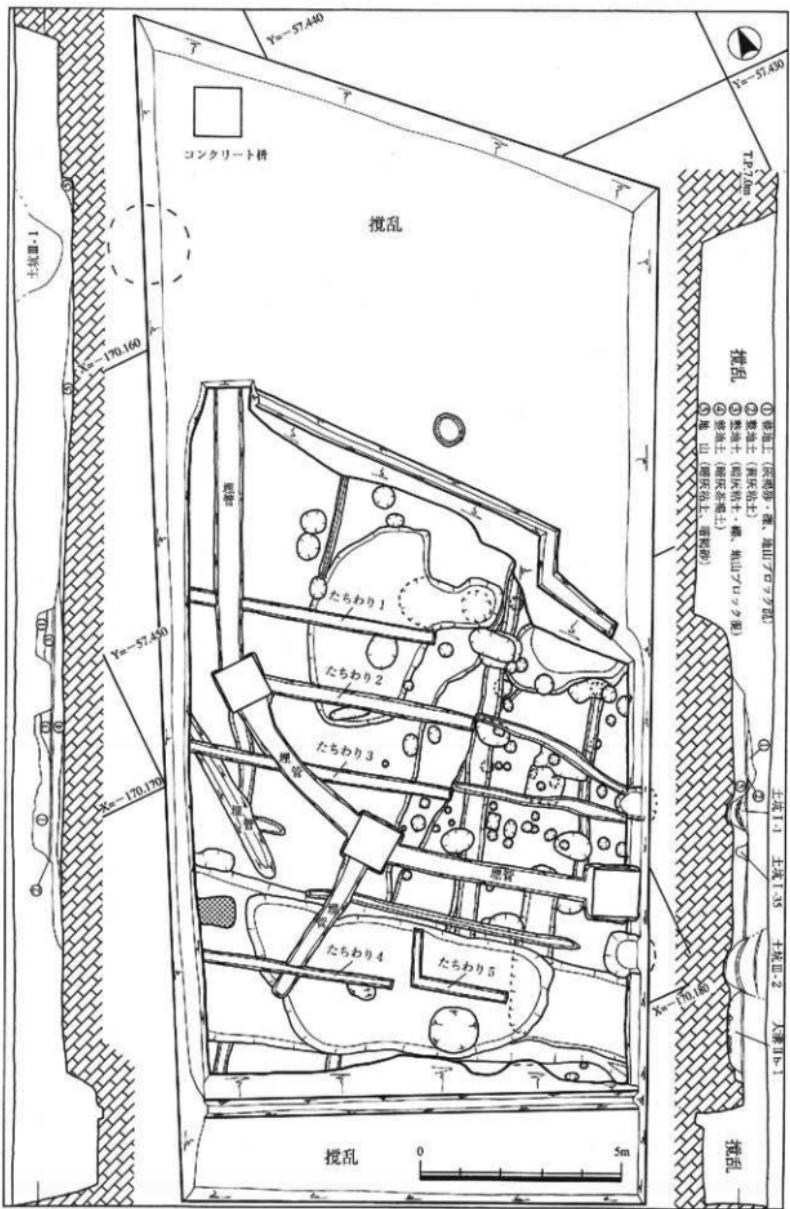


図7 遺構全体図及び土層図（1／120）

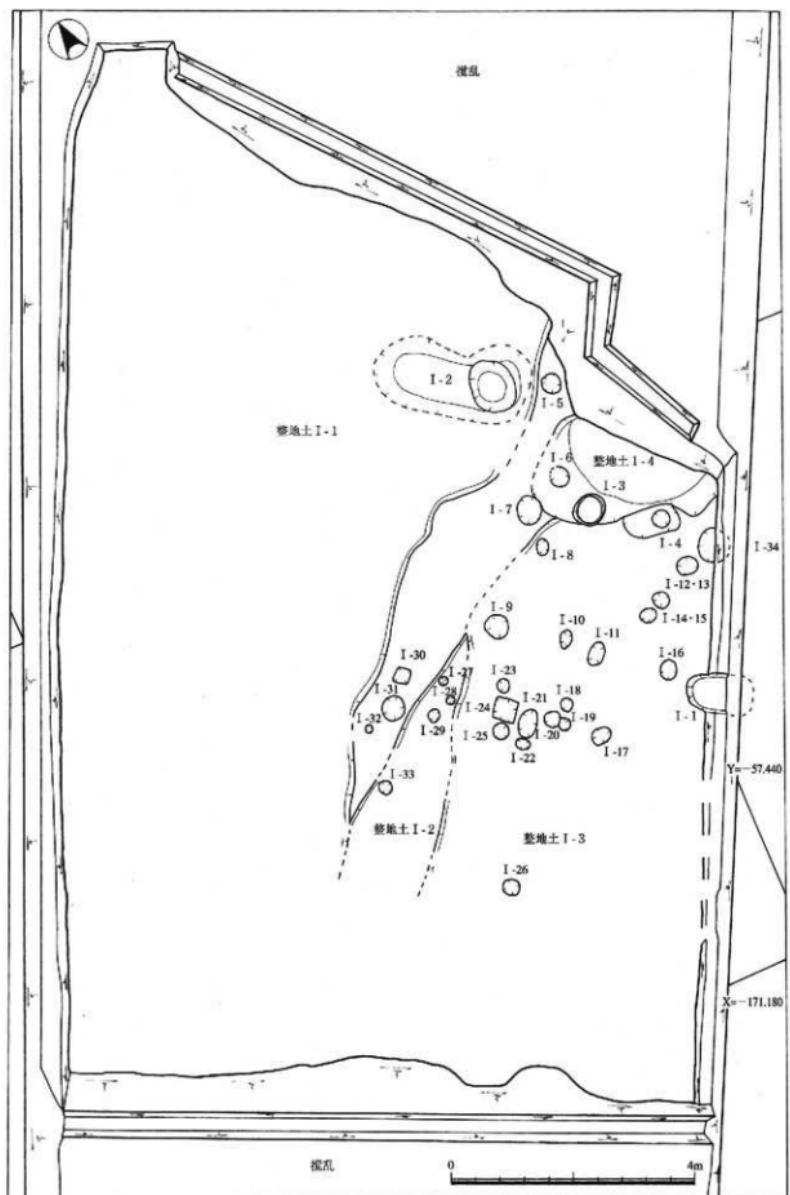


図8 I期の遺構 (1/80)

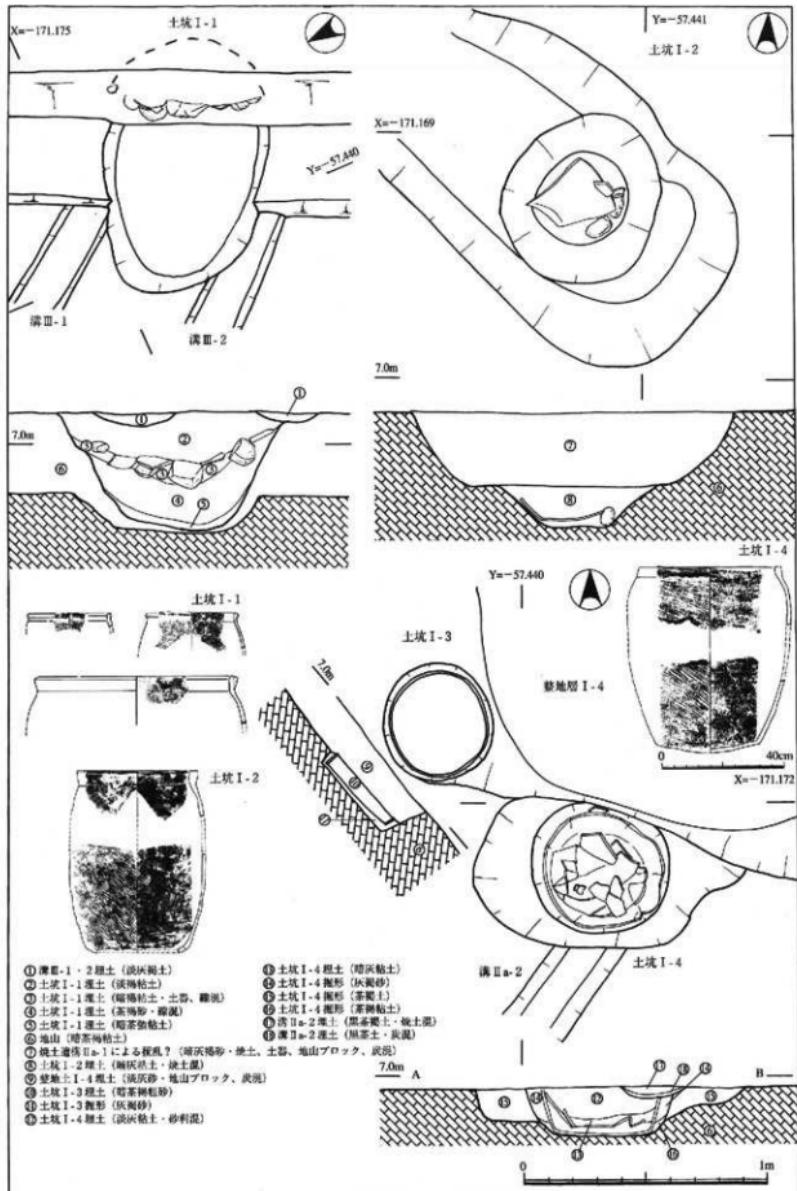


図9 I期の遺構平面及び断面図 (1 / 20)

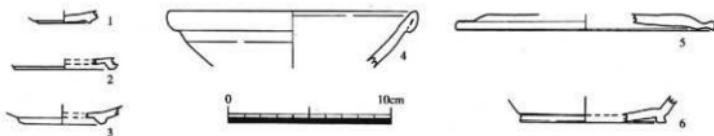


図10 I期の遺物(1)

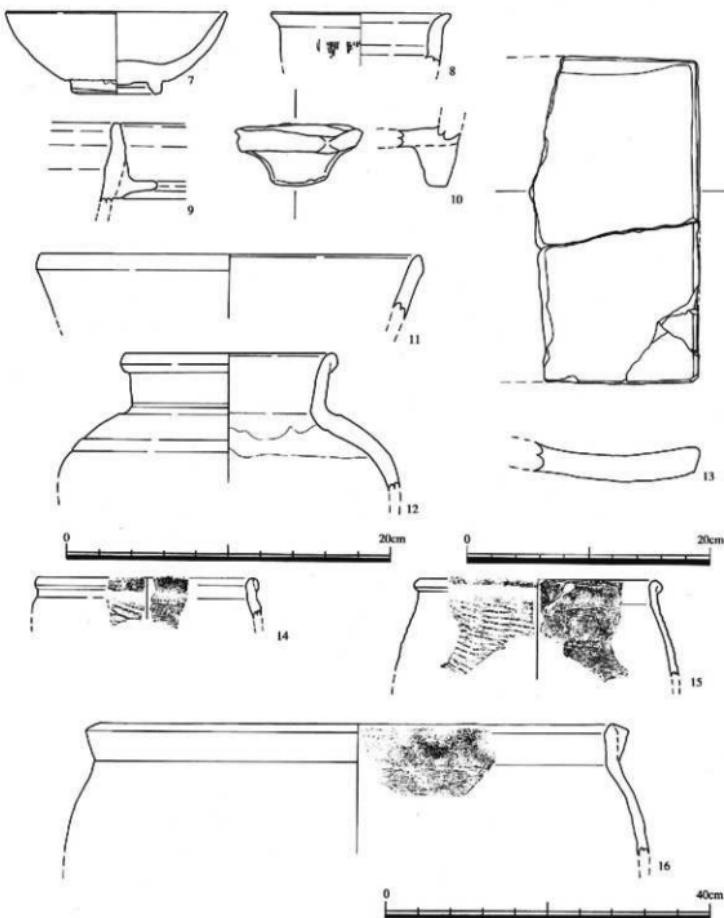


図11 I期の遺物(2)

甕が据えられていた。上面は溝II a-2によって一部が削られる。掘り底には高さ20cm程度の大甕底部が残されていた。その内部には大甕の口縁部が落ち込んでいた。大甕を復元したところ、胴部約20cm程度が欠損しており、この部分が基盤土と共にII a期以降の形成によって削平されたと考える。

3. I期の遺物(図10~13 図版11)

須恵器杯蓋(5)は口径16cm、身(6)は高台径10cmを測る。蓋は断面の厚さが一定でなく、身は高台の外側からすぐ立ち上がる特徴より、共に奈良時代後期のものと考える。

瓦器椀は高台が小さく退化したもの(1)と、しっかりした高台をもつもの(2・3)がある。共に13世紀代のものである。瓦質上器香炉(8)は表面に雲母の付着が見られ、外面はスタンプによる装飾が施されている。口径11cmを測る。16世紀代のものである。

青磁碗(7)は厚手で、青磁釉を内面と外面の高台際まで施す。高台は粗く削られる。白磁碗(4)は玉縁口縁で口径15.2cmを測る。森田・横田分類IV類に属し、12世紀代のものである。

備前焼壺(12)は玉縁口縁で、内面には粘土紐の痕跡が残る。擂鉢(17)は10本単位の捺目が斜めに交差し、口縁部の立ち上がりが高い。乗岡編年近世1期に属する。16世紀後半のものである。

土師質土器には火鉢と羽釜がある。火鉢(10)脚部は貼り付け後、ナデ調整される。焜炉類の可能性もある。羽釜(9)は鉗から口縁部がほぼ直立する。内外面はナデ仕上げされる。

平瓦(13)は凸面をナデ仕上げ、他はヘラ削りする。焼けた表面の剥離が著しい。その他、凸面全面に粗い離れ砂が付着し、大きく厚い平瓦片が少量発見されている。付近の中世寺院から持ち込まれ、転用された可能性もある。

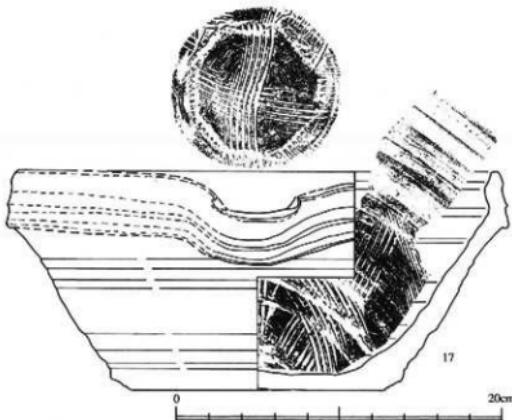


図12 土坑I-2発見備前焼擂鉢(1/3)

淡焼は甕と鉢がある。鉢(11)は表面の磨耗が著しく、調整は不明である。口径、23.2cmを測る。甕は玉縁口縁(14・15)と、台形口縁(16・18・19)のものがある。いずれも外面口縁部直下は平行タタキで、底部に向けて斜め方向のタタキとなる。内面はハケ調整を施す。ほぼ全形のわかるものは焼きがあまく淡黄褐色で、口径40cm(18)と、口径47cm(19)を測る。体部と底部の境はヘラ削りする。

玉縁口縁の甕は口縁部内側を強くナデし、直立気味にする。これは台形口縁の形態と共通するもので新しい要素である。台形口縁の甕は口縁部のくびれが明瞭にわかる特徴をもつ。以上甕には時期差があり、新しいものは17世紀初頭と考える。

次節に述べるⅡ期遺構とその上面の埋め土を洗浄中に銅錢が発見された。草書体で「至道元寶」の文字がある(目次下の挿図)。「至道元寶」は中国北宋の至道元年(995年)初鑄である。しかし、裏面が平らで外縁がつくり出されないことから、わが国で踏み返し模鋸された錢と考える。鍛造土坑Ⅱb-1の時期か、それ以前に混入したものである。

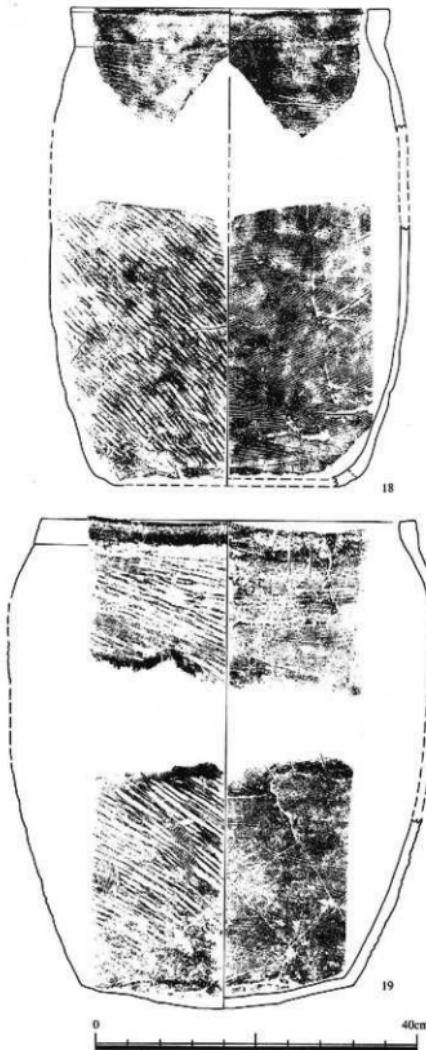


図13 土坑I-2・土坑I-4発見淡焼大甕(1/6)

4. II a 期の遺構 (図15 図版5)

I 期の遺構を覆う整地土層の上面を切り込む遺構のうち、調査区南端で発見された大溝に破壊される切り合い関係がよみとれるものがあった。しかも、切られた遺構の埋め土は焼土・炭などが充填されており、この特徴的な埋め土をもつ遺構がいくつかあった。遺構上面には焼けた瓦や壁土なども散乱しており、焼失建物を整地した残土によって遺構が埋没したと考える。以上を手がかりに II 期の前半に II a 期を設定した。発見された遺構には焼土遺構・土坑・溝がある。

焼土遺構 II a - 1 は調査区中央にある南北5.2 m、東西約 6 m、深さ 10cm 程度の浅い楕円形土坑である。埋め土は黒茶褐色で炭・焼けた壁土などが多量に含まれる。土坑 II a - 1 ~ 7 の埋め土も焼土遺構 II a - 1 とよく似ていた。埋没時期は同じと考える。溝 II a - 1 は調査区中央に位置し、幅約 0.5 m、長さ 9 m 以上を測る。溝 II a - 2 は調査区東端に位置し、幅約 0.3 m、長さ 7 m 以上を測る。二つの溝の埋め土は焼土遺構 II a - 1 と共に通する。溝 II a - 3 ~ 6 は埋め土が黄褐色砂礫土で焼土などは含まない。溝 II a - 3 と 5 は搅乱によって途切れるが規模や軸が同じでつながると考えられる。しかも、発見された溝群はほぼ 2.8 m 間隔で南西から北東に向かって軸をそろえて並行して掘削されており、埋没する時期が異なったとしても、一連の遺構である可能性を指摘できる。

5. II a 期の遺物 (図14 図版11)

青花皿(20・22)は幕筒底の皿である。外面に波涛文、見込みに花文が描かれる。共に小野分類染付皿 C 群に属し、16世紀後半～17世紀初頭のものである。土師質土器皿(21)は手づくね成形で口径 11cm を測る。口縁部は外反し、胎土は淡黄色である。

平瓦(25)の調整は I 期(13)と同様である。凹面の 2/3 が変色磨耗しており、屋根を葺いた際の重なり部分が推測できる。巴文軒丸瓦(23・24)は巴文の尾部が長い。軒瓦周縁部・丸瓦部を欠損し、外面は焼けて変色する。焼けた壁土はスサ入り粘土で竹芯痕が残る(図版 11 A ~ C)。

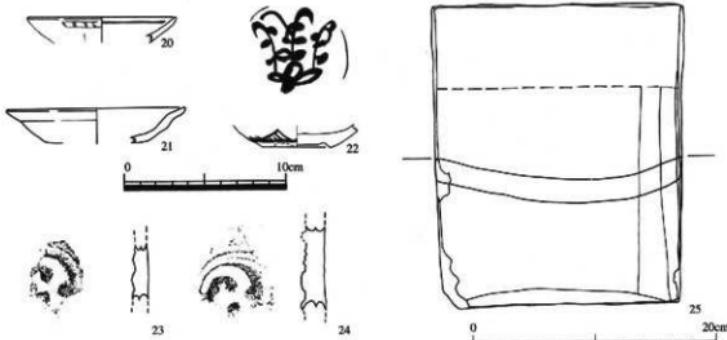


図14 II a 期の遺物

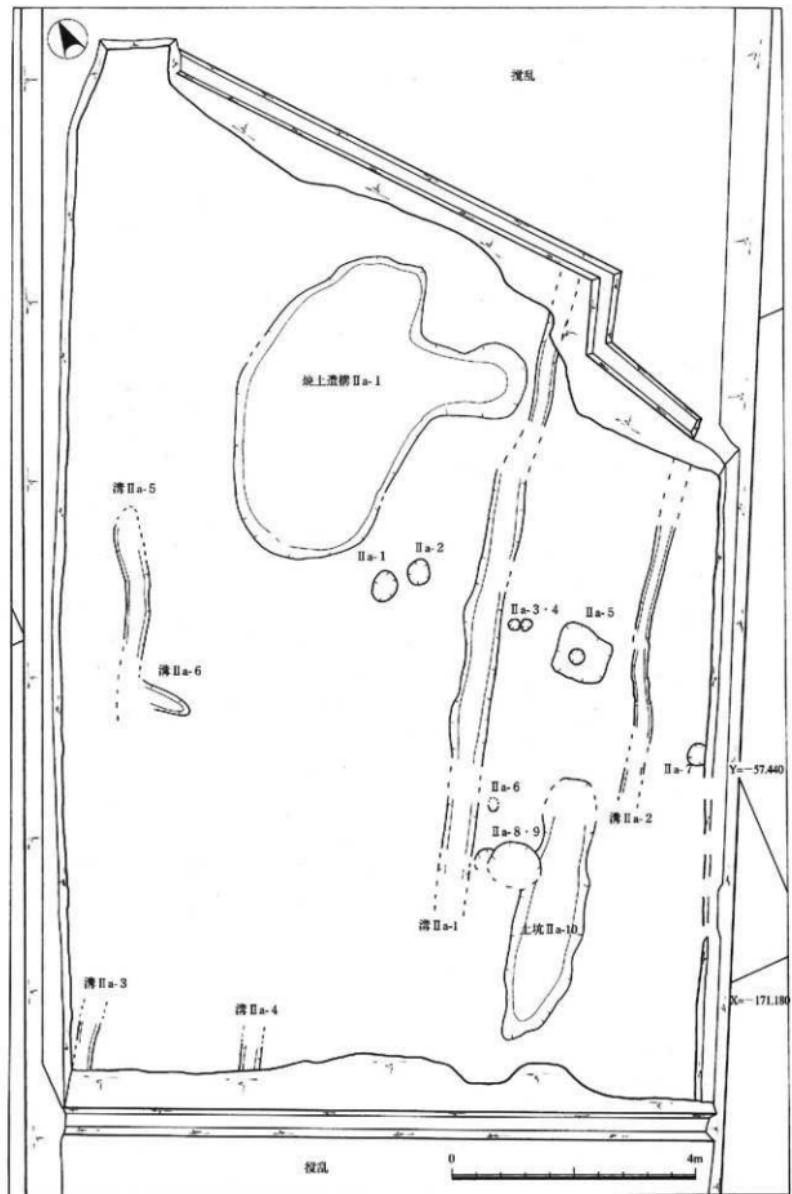


図15 IIa期の遺構 (1/80)

6. II b 期の遺構（図16・17 図版6～8）

II a 期の遺構を壊して形成された土坑（土坑II b-3・5～9・11～13・15～19）、大溝II b-1などをII b 期の遺構とした。その他の土坑（土坑II b-1・2・4・10・14・20・22・23）は上記土坑と埋め土が共通するためこの期と考えたがII a 期の可能性もある。土坑にはほとんど遺物が含まれず性格はわからない。

大溝II b-1は調査区南端で発見された東西に伸びる浅い溝で西端は幅4.4m、東端は幅2.4mを測る。深さは40cm程度で流水による堆積物ではなく、砂利・礫混じりの灰褐色土で人工的に埋め立てられた様相を示す。大溝の中央、底に鍛造関連の廃棄物を捨てた鍛造土坑II b-1が、その西側に焼土遺構II b-1があった。大溝西側の延長方向には天守閣北側の内堀になる。

焼土遺構II b-1は大溝底の西端から発見された。溝の底が赤く焼け、炭の破片が散乱するものの、範囲は明瞭でない。

鍛造土坑II b-1は焼土遺構II b-1の東側、南北3.2m、東西約6.2mを測る。明瞭な掘り込みは見られないものの使用され粉々になった炭などが高さ30cm程度の山にされており、大溝の堆積物と区別できる。堆積物には炭の他、鐵カス・フイゴ羽口・陶磁器・瓦などが含まれていた。

主な堆積物である炭は自然に堆積したものではなく、上砂の混じる間層や流水堆積の痕跡を残さない。一時期に大溝の底に積み上げられた様な状態だった。

鐵カスは直径10～30cm程度のいわゆる椀形滓と呼ばれる形状が大半で、総量40kg以上にのぼった。フイゴ羽口は復元出来たもので6本、その他の破片も含めると10本以上あったと思われる。すべて、先端はアメ状に溶解しており、使用後に捨てられたものとわかる。陶磁器には唐津焼皿・碗、備前焼擂鉢、丹波焼擂鉢、瀬戸焼小皿などがある。その他、土師質土器皿がある。土師質土器皿・唐津焼皿には灯芯の痕跡が残ることから灯明皿として使われていた様だ。瓦には丸・平瓦の他、巴文軒丸瓦がある。いずれも焼けた痕跡はない。

発見された遺物と堆積状況から付近で大規模な鉄製品の鍛造が行われていたことがわかる。椀形滓は鉄原料に含まれる不純物が加熱に際して炭床にしたり落ちたものが固まったものと理解できる。この様な不純物が40kg以上にのぼることから製品は膨大な量だったと考える。また、フイゴ羽口の量や炭の堆積状況から一時期に複数の工人が作業していたことがわかり、灯明皿が5個以上発見されていることから作業は複数の室内だったらしい。

また、鍛造土坑の西側で発見された焼土遺構を評価すれば、工房は土坑のすぐ西側に推定することができる。しかも、大溝は西に幅が広く東に幅が狭いこと、大溝西側の延長方向に天守閣がなく内堀となることから、大溝は鍛造に際して浜風を集める機能があった可能性もある。ただし大溝は浅く、作業場の建物や塀跡は確認出来ていない。

7. II b 期の遺物（図18～20 図版12・13）

図示したものはすべて鍛造土坑II b-1出土である。土師質土器皿(38～40)は手づくね成形で外

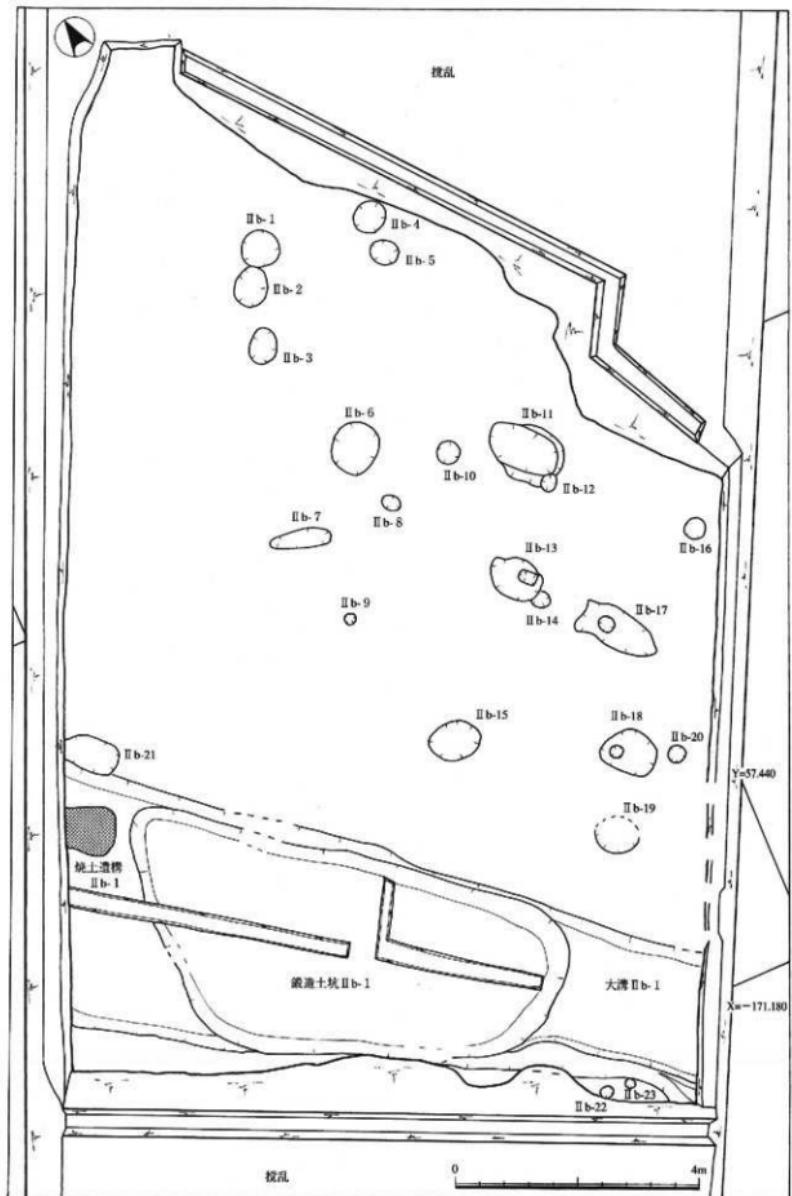


図16 II b 期の遺構 (1/80)

面に指頭圧痕が残る。底部と体部の境が明瞭で、口縁端部が外反するもの(39・40)と内湾気味のもの(38)がある。胎土は淡黄色である。大半の土師質土器皿には灯明芯の痕が残る。

瀬戸焼灰釉皿(41)は、高台内に輪ドチの痕が残る。

唐津焼は碗・皿・鉢・瓶がある。灰釉碗(44)は外面をヘラで粗く削る。灰釉皿(42・43)は内面から外面部中程まで灰釉を施す。皿(43)には灯芯痕が残る。鉄絵溝縁皿(45)は内面から外面高台際まで灰釉を施す。見込みには胎土目痕が残る。灰釉輪花鉢(46)は内外面共に灰釉を施すが口縁端部は無釉である。底部には貝目痕が残る。この製品の器種については、斐の蓋とする説もある。伊万里市の焼山中窯で同製品が出土している。薺灰釉瓶(47)は厚い薺灰釉がしたたる。内面には青海波のタタキがある。(43・46・47)が大橋編年Ⅰ期、(42・44・45)がⅡ期に属す。

丹波焼鉢(48～50)は掠目が1本引きで口縁端部を方形に仕上げる。口縁部の内面に沈線が入る新しい様相を示すもの(49)もある。大平編年I型式に属する。

備前焼鉢の口縁は板状で高いもの(52)、端部が丸みを帯び、断面三角形に近いもの(51)がある。摆目は摆目が斜めに交差するものばかりである(53)。乗岡編年近世1期に属する。

瓦には均整唐草文軒平瓦(54)・巴文軒丸瓦(55～58)の他、平瓦・丸瓦(59)がある。軒丸瓦の巴文の尾部は長く伸びて重なり、珠文は小さく密にある。丸瓦は凹面がコビキ A・B 技法による。概して A 技法が多い。以上を踏まえ、遺構の年代観は付載 2 (P 37) に詳述する。

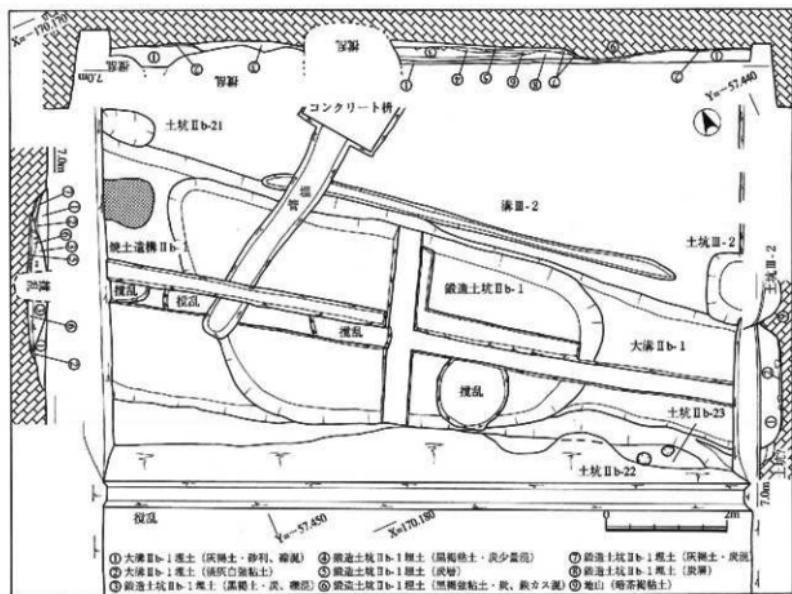


図17 錬造土坑Ⅱ b-1 平面及び断面図 (1/80)

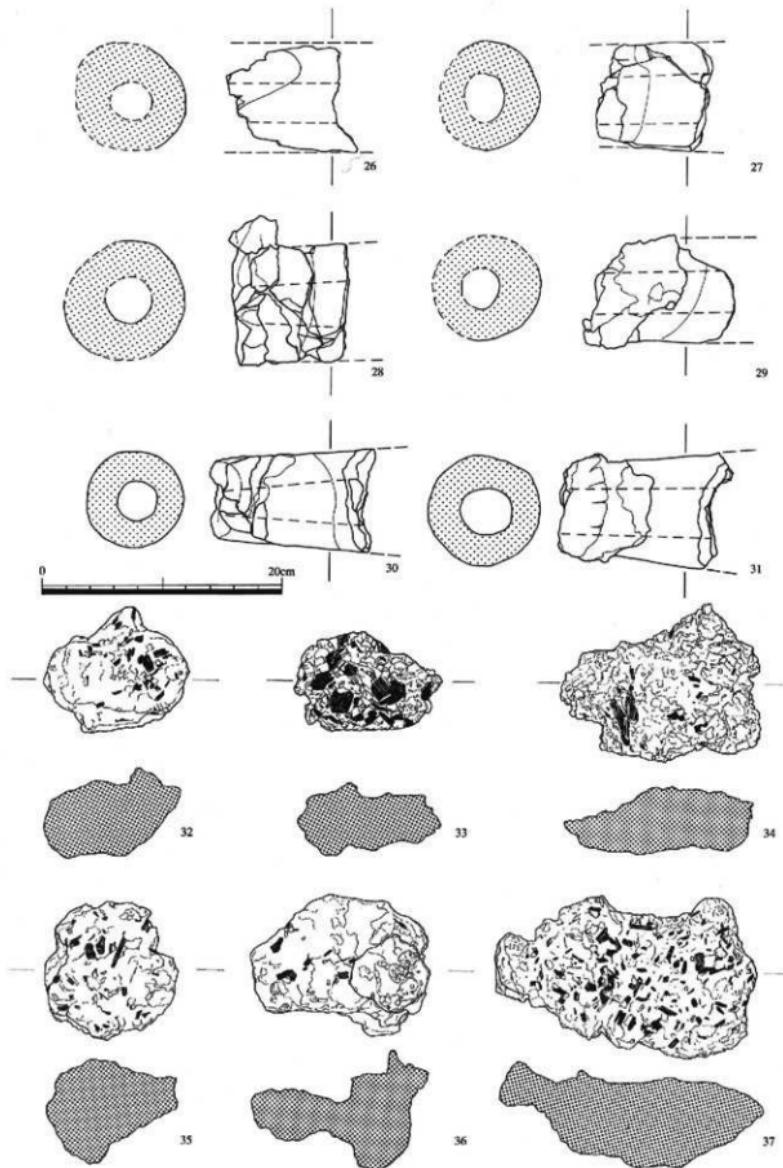


図18 錫造土坑Ⅱb-1発見フイゴ羽口・鉄カス (1/4)

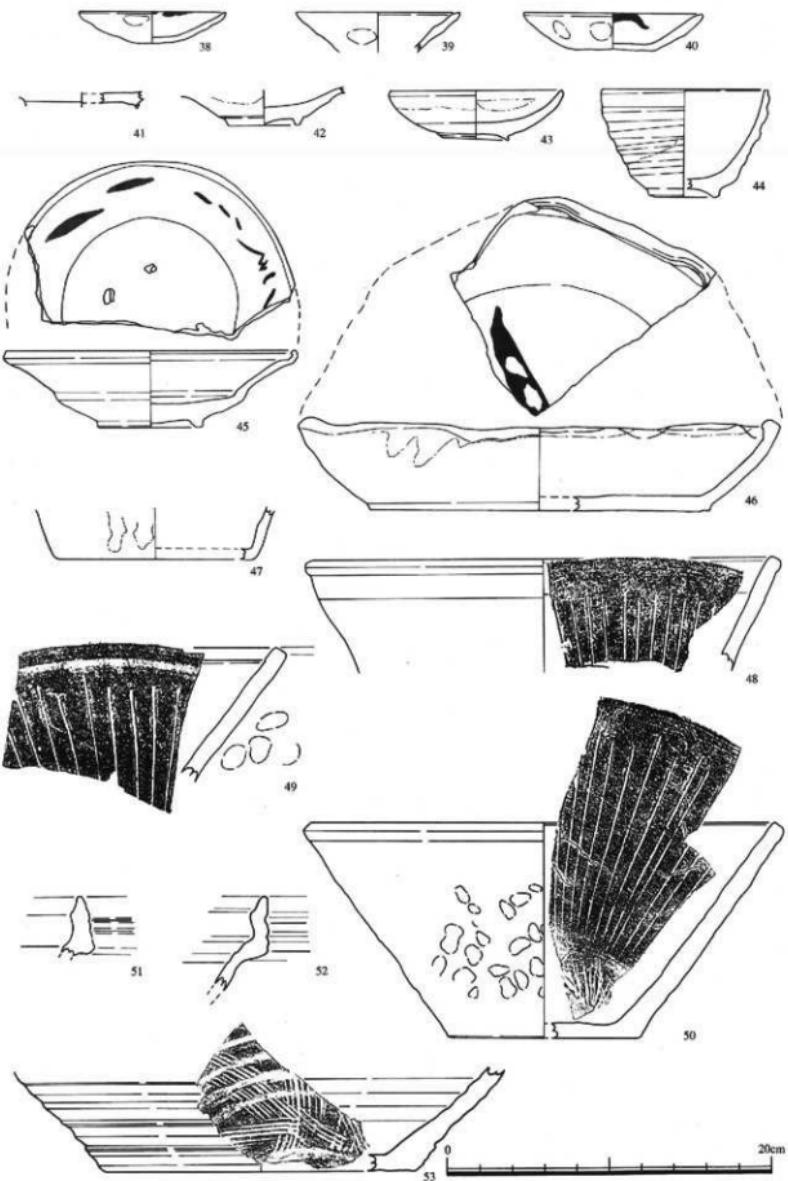


図19 銀造土坑Ⅱb-1発見陶磁器 (1/3)

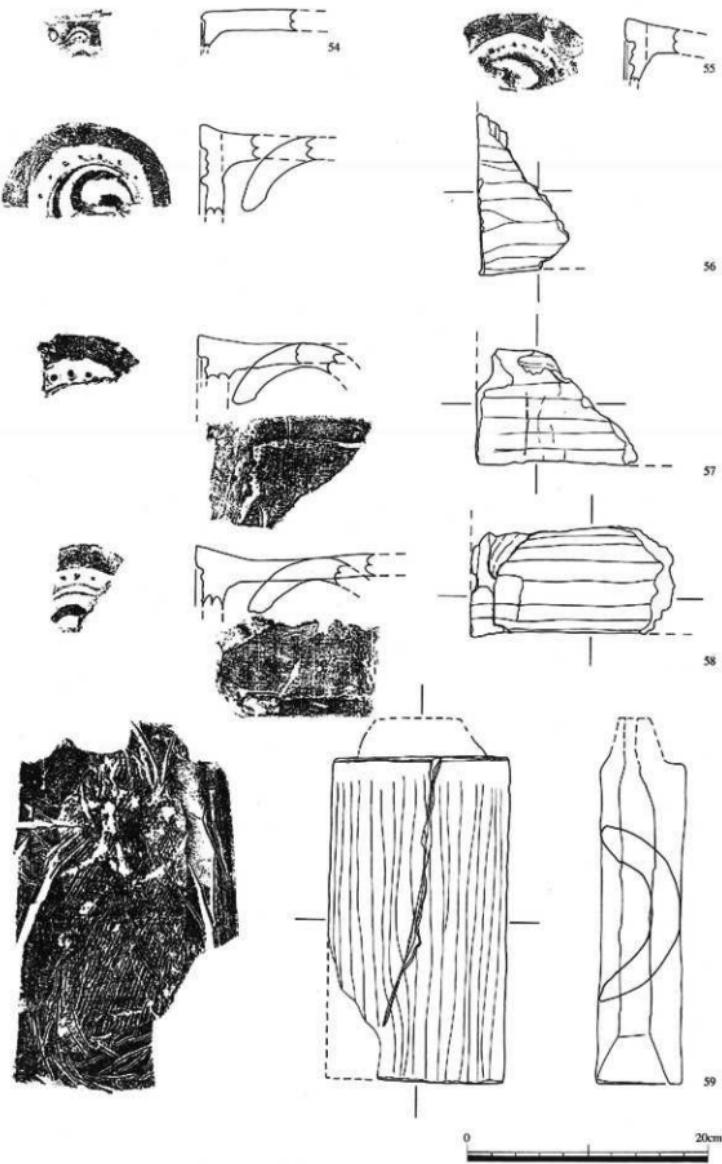


図20 錬造土坑Ⅱb-1発見瓦 (1/4)

鍛造土坑Ⅱb-1から発見された鍛造の実態を示す遺物には総量40kg以上、100個体に及ぶ鉄カスとフィゴ羽口がある。フィゴ羽口は外径が5cm程度で、内径は1.6cm～2.1cmである。羽口の先端には溶け出したアメ状の不純物が絡まっており、焼けた痕跡と合わせ、羽口を設置した角度がうかがえる。管部が同じ内径のもの(26)・(27)・(29)・(31)、先端がすぼまるものがある(28)・(30)。羽口は先端を打ち欠いて使用し直したもの(28)・(29)もあり、孔の直径は一定しない。

鉄カスは直径5cm～10cm程度の碗形で赤くさびつき、炭が混入する(32)～(37)。中央がくぼみアメ状の不純物が乗るものもある(36)・(37)。くぼんだ中央部分にフィゴの風が当たり、辺縁に溶け出したフィゴの不純物が絡みついた状態がよくわかる。

8. Ⅲ期の遺構（図21 図版4d）

Ⅱ期の遺構を壊して上層の堆積土と共に埋め土をもつ溝が発見された。これらはⅡ期の遺構と峻別できるのでⅢ期とした。また、調査区北側の搅乱土中に江戸時代後期から末にかけての陶磁器や瓦を大量に包含した土坑Ⅲ-1が確認された。切り込み面は明瞭でなく、大半は調査区外に続くものの江戸時代の家老屋敷に関する遺構と位置づけることができる。その他、調査区南東隅から近世～近代の陶磁器と焼土などを含んだ土坑Ⅲ-2が発見された。切り込み面ははっきりしないものの、戦後の府立高校造営以前のゴミ穴だろう。

北側搅乱下面に井戸Ⅲ-1が残されていた。この井戸は長さ34cm、幅27cm、厚さ3.5cmの平瓦を八枚一段として直径約70cmの井戸枠を組んでいた。確認できた井戸枠は五段で最上段は地表下2.25mのところである。瓦組み井戸枠の下には長さ61cm、幅6.5cm、厚さ0.5cmの木板33枚を円形に打ち込んで最下段の井戸枠としていた（図版とびら写真）。井戸内から18世紀代の磁器片一点が発見されている。しかし、瓦の形態から近世末に掘削・形成されたと考える。

9. Ⅲ期の遺物（図22～24 図版14・15）

陶磁器・土師質土器・瓦がある。大半は土坑Ⅲ-1からみつかった。

磁器は全て肥前磁器で、碗と皿が多数を占める。碗は寿文筒形小坏(63)・牡丹文筒形碗(69)・松竹文碗(71)・松文碗蓋(74)・白磁朝顔形碗(72)がある。いずれも厚手の碗である。皿は唐草文皿(61)・染付玉縁皿(62)・芭蕉文皿(75)・花鳥文輪花皿(76)・菊唐草文皿(79)・菊花文皿(78)がある。菊花文皿は高台内に角福の銘をもつ。他に蓋物の蓋(60)・色絵秋鹿文輪花鉢(73)・梅枝文そば猪口(70)がある。色絵秋鹿文輪花鉢は柿右衛門手の上手のものである。焼継ぎが施されており、高台内に焼継ぎ材でL字形の記号を記す。食膳具以外に化粧道具の赤絵紅猪口(64)・仏前に飯を供える唐草文仏飯具(65)がある。(62・73)は大橋編年Ⅲ期、(61・65～72・74・78)はⅣ期、(60・63・64・75～77)はⅤ期に属する。

陶器は京焼・京焼系陶器・瀬戸・美濃焼・備前焼・丹波焼が出土している。碗皿類の他、調理具、植木鉢などがある。

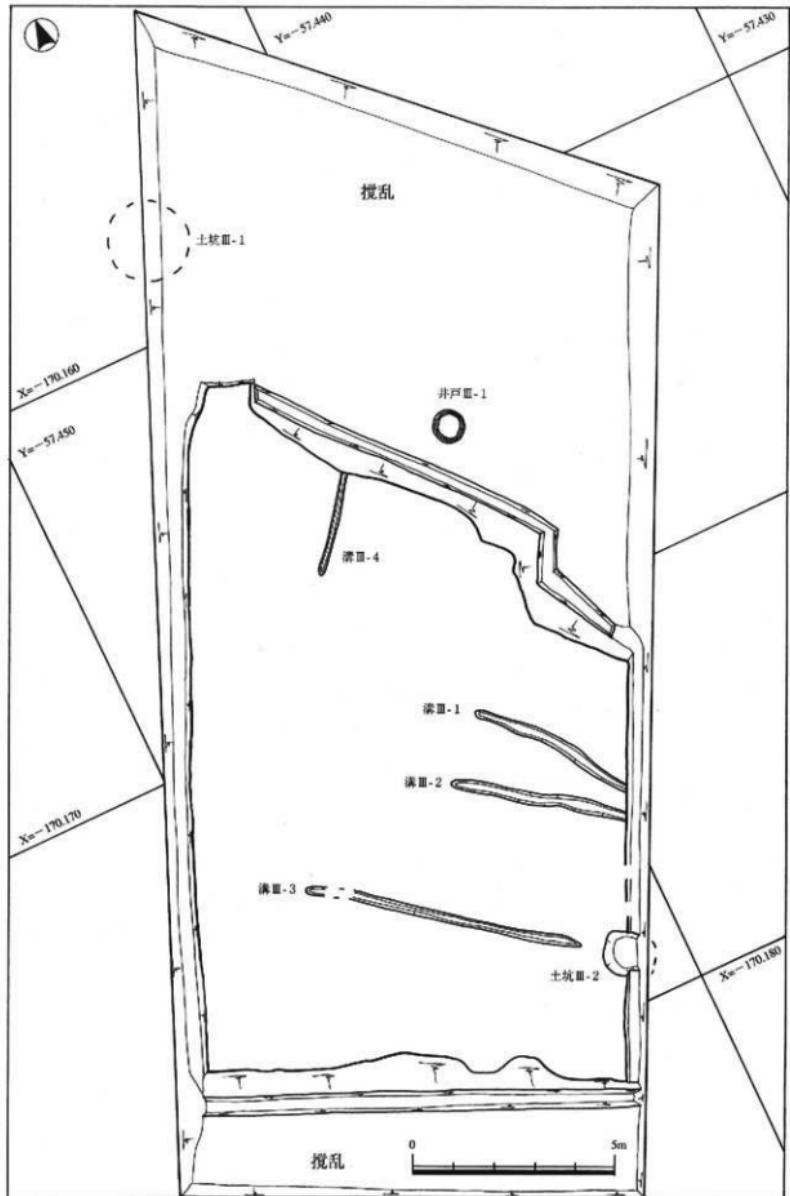


図21 III期の遺構 (1/120)

京焼は色絵牡丹文碗(79)がある。青・緑・黄などの釉薬を使う盛上手である。口径8.8cmを測る。類品に岩倉焼の印をもつものがあるが、この文様装飾は岩倉焼獨自のものではなく、栗田口の窯場で焼かれた製品に見られる。

京焼系陶器は碗・鍋・土瓶がある。鉄絵碗(81)は見込みに鉄絵を施し、見込みに三点の目痕を残す。鉄釉鍋(83・88)は大小がある。小型の鍋(83)は底部に煤の付着が見られないことから、鍋以外の用途に使用されたと思われる。鉄釉算盤形土瓶(87)は外面に鉄釉の上から灰釉を流し掛けた。脚は地に付かず痕跡器官となっている。土瓶蓋(85)は全面無釉である。胎土に小石を多く含んでいる。鉄釉土瓶蓋は、つまみに菊花文の印を押して作り出す。

丹波焼鉄釉徳利(84)は内面無釉で外面に鉄釉を施す。

瀬戸・美濃焼爐茶碗(80)は灰釉を掛けた上に、外面の体部中程から高台内まで鉄釉を掛ける。灰釉鉢(82)は高台無釉で、釉薬は黄色に発色する。片口が付くタイプである。

堺焼播鉢は8本単位の擦目をもつ。口縁部内面に段をもち、外縁帯に高さをもつもの(91)、外縁帯が大きく張りだし、断面三角形のもの(91)がある。底部には輪状の焼台痕が残る(91)。(91)は白神分類I型式1段階、(90)はII型式2段階に属する。

產地不明陶器植木鉢(89)は焼縮め口縁端陶器で、口縁端部に沈線をもつ。堺焼の系統か。

土師質土器には、皿・焼塩壺・焰烙がある。皿は口縁端部の外反するもの(92)と内湾するもの(93・94・96)がある。胎土は淡黄褐色と赤褐色がある。灯芯痕を持つ、灯明皿として使用されていたものもある(92~94)。いずれもロクロ成形で底部には回転糸切痕が残る。柿釉灯明皿(97)は内面から外面口縁直下まで柿釉を掛ける。焼塩壺(98・99)はロクロ成形で、18世紀後半のものである。焰烙は底部外型作りで、体部は直線的に立ち上がる。外面体部はナデて凹凸になる口径32.8cmのもの(101)と、ナデ仕上げる口径28cmのもの(100)がある。

瓦質土器は火鉢がある(103)。外面はヘラミガキされ、体部に円形の穴を空ける。口径13.4cmを測る。瓦を転用した面子(102)は直径4.2cmで、丁寧に形成されている。

瓦は丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・棟端瓦・道具瓦がある。軒丸瓦(104~106)は全て巴文軒瓦である。巴文は厚く盛り上がり、尾部が短い。珠文は大きく間隔が広い。軒平瓦(107・108)は全て均整唐草文軒平瓦である。棟端瓦(110)は全形がわからない。厚さ1.8cmを測る。道具瓦(111)は厚さ1.7cmを測り、貼り付けの段をもつ。

以上、Ⅲ期の遺物は一部、17世紀代~18世紀代の陶磁器が含まれるもの、そのほとんどは18世紀後半~19世紀前半のものである。土坑Ⅲ-1は出土遺物から、18世紀末~19世紀前半の年代を示す。家老屋敷の権勢を窺はせる上手なものや、組物の陶磁器はなかったが、多種多様な產地・器種・文様をもつ陶磁器が発見されたことは、江戸時代後期の遺物組成によく対応するといえよう。

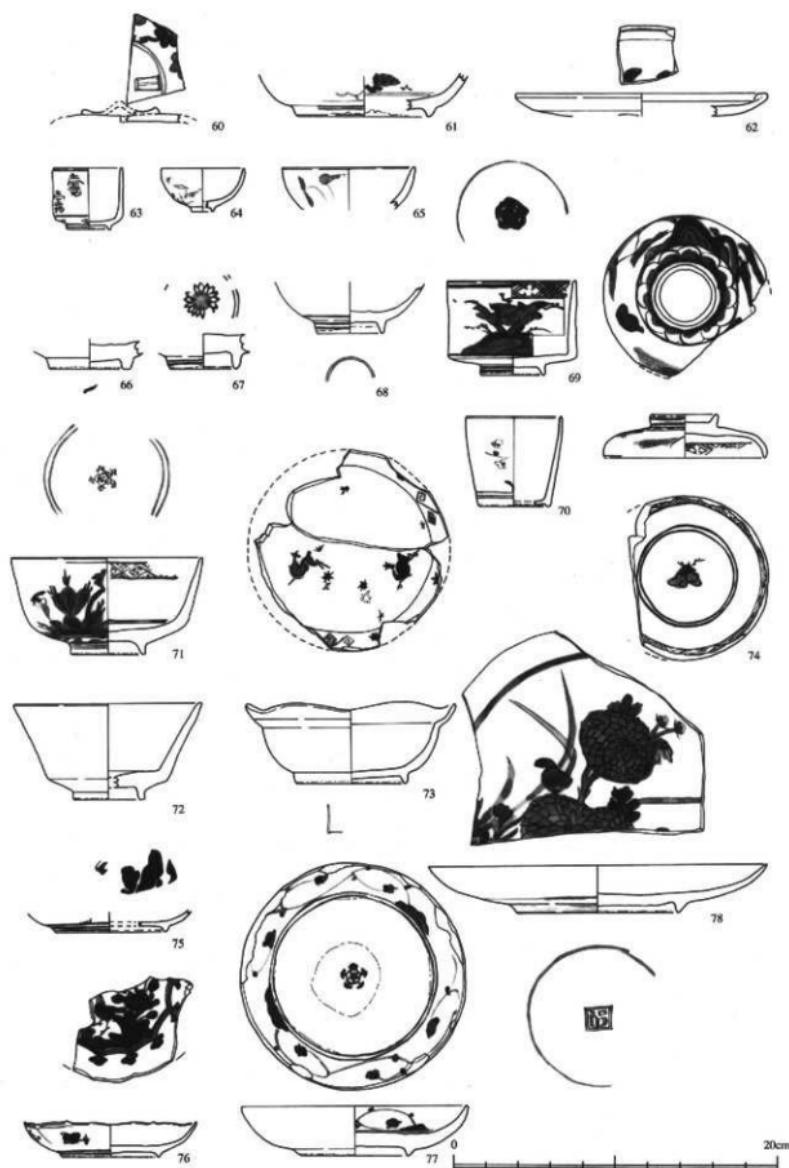


図22 Ⅲ期の遺物（1）

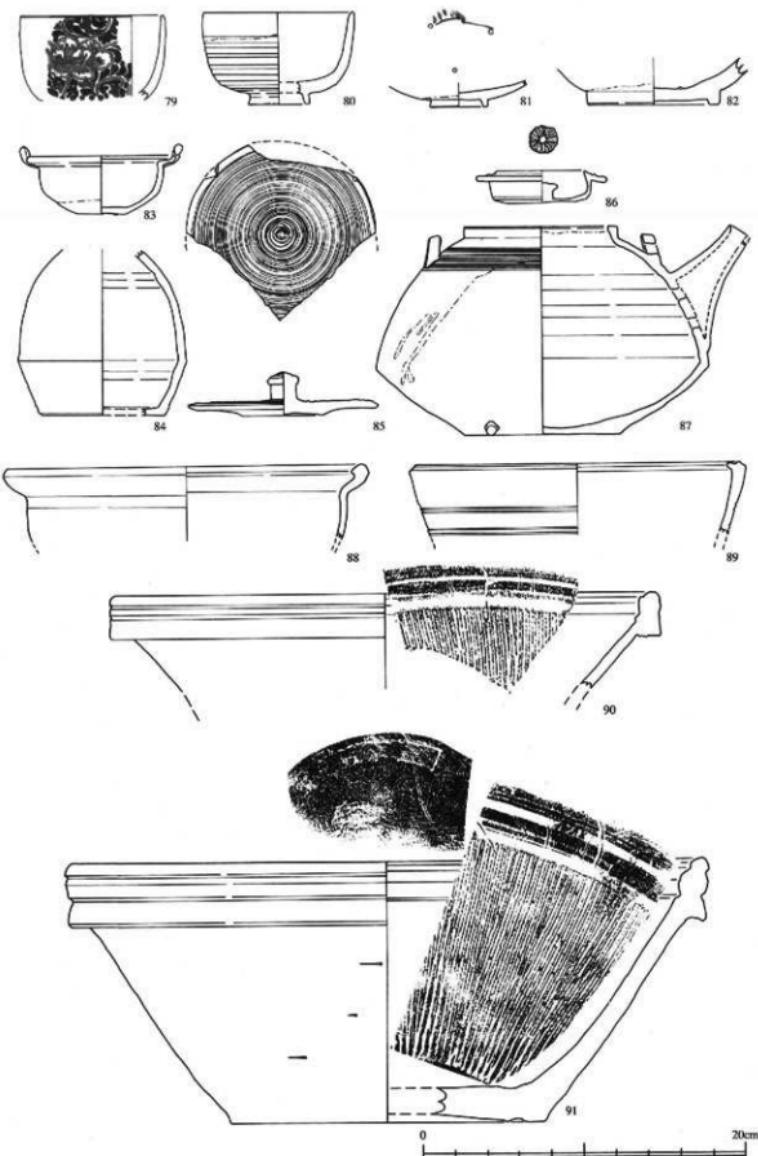


図23 Ⅲ期の遺物（2）

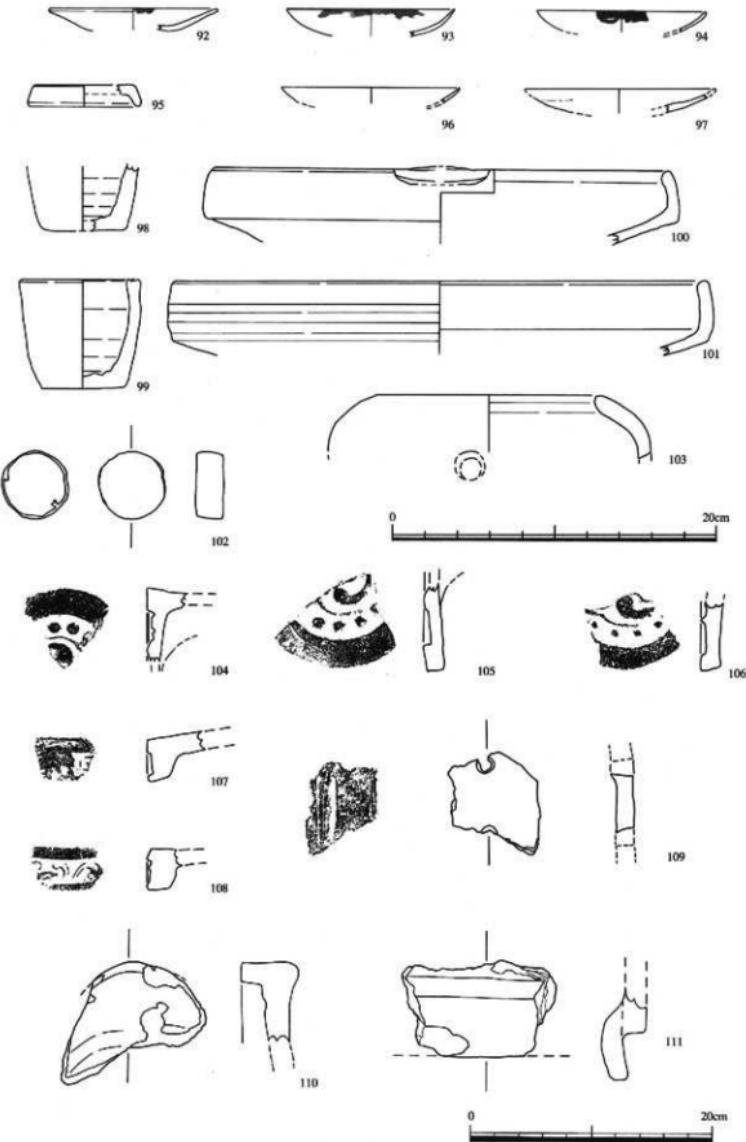


図24 三期の遺物（3）

第Ⅳ章　まとめ

1. 遺構変遷

今回調査では整地層を境にⅠ～Ⅲ期に大別できる遺構・遺物が発見された。以下、各期ごとに遺構の変遷を概略する。

Ⅰ期（～1595年）：小出秀政の近世城郭に伴う整地層下層の遺構である。大小の土坑群があり、その性格は判然としない。大型の甕や曲物を据えた土坑もあり、陶磁器や瓦が含まれることから居住区の一角と考える。遺構・遺物の大半は大坂城の豊臣前期に位置づけられる。

Ⅱ期（1595～1620年頃）：近世城郭完成直後の遺構である。a・b二期に細分できる。

Ⅱa期の基礎は内堀・外堀を掘削した整地層と考え、上限年代が推測できる。焼けた壁上や瓦を伴う整地層と南北溝・上坑からなる。焼失した建物を整地した痕跡と考える。建物の位置や機能は定かでない。調査区の北端、岸城神社の南堀に石垣が屈曲する部分が残り、焼土などを伴う溝がその部分に取りつくとすれば石垣に接した防御施設が火災に遭った可能性もある。

Ⅱb期のもっとも新しい遺構は鍛造土坑Ⅱb-1である。遺構群の年代は出土瓦の製作技法や肥前磁器を含まないこと、陶磁器の編年観から城郭普請完成以降で豊臣期の末頃と考える。

Ⅲ期（1620年～）：筆頭家老中家屋敷跡にあたる。しかし、良好な遺構は発見出来なかった。搅乱土中に廐棄土坑を確認し、江戸時代後期の生活様式を伝える多様な陶磁器が出土した。

2. 鍛造土坑Ⅱb-1の性格について

調査区の南端、大溝内に鍛造土坑Ⅱb-1が発見された。この遺構は掘り込みが明瞭でないものの炭・鉄カスなどが大量に山積みされており、堆積土中には風雨などによる土砂の流れ込みが見られなかった。比較的短期間に人为的に投棄されたものと考えられる。炭に混ざってフイゴ羽口10本以上、鉄カス100個体以上で総量40kg程度、陶磁器、瓦片などがみつかった。フイゴ羽口は溶解した先端を打ち欠いて再利用したものも見られる。フイゴ羽口の形状と碗形の鉄カスから鉄製品を製作した鍛造作業の廐棄物であることがわかる。陶磁器には灯火芯痕の焦げがみられる土師質土器Ⅲ3、唐津焼Ⅲ2が含まれ、瓦片の出土などから作業場は複数だったと考える。同時にみつかった陶磁器類は編年研究の成果から1610～20年までと考える。（陶磁器の詳細については付載2参照 P37）。ただし、大坂や堺では戦乱の気配が濃くなった1614年から街が灰燼に帰してしまった1615年にかけて、順当に生産地から陶磁器が供給されたとは思えず、本来流通すべき型式の欠落や普及の遅れなど、型式差と時間差がスムーズに対応しないこともあるだろう。生産地においても年代を限定する決め手はなく、したがって、大坂・堺の陶磁器と単純に比較して年代を限定するにはいたらなかった。

さて、鍛造土坑の周辺ではどのような鉄製品を製作し、それは何を意味するのだろうか。各地の城郭で発見された鍛造遺構の調査類例が手がかりとなる。

京都府シミズ谷城では戦国末期山城下層遺構から鍛冶遺構と甲冑・釘・鏃・包丁などの鉄製品残片や鉄素材が発見されている。調査担当者はこれらを溶解して鍛造盤鉄を得、さらに農具または武器がつくられていた可能性を推測している。城内で刀剣などの武器を製作していた痕跡は青森県浪岡城や北海道勝山館でも発見されており、16世紀代の交易が推定されている。

東京都八王子城は1590年、秀吉の小田原攻めで落城した城である。山頂本丸の東側山裾に居館地区のひな壇があり、御主殿跡が発見されている。その南端で鍛造跡が発見された。付近から1500点余りの銅鉄が溶着した状態で発見されており、銅弾などの武器材料であったことが指摘されている。その他、火薬に関する茶臼や石臼も見つかっており、鉄弾も450点ある。このように城郭中枢部で銃弾が製作されて事例として、関ヶ原合戦後の三成昌城、滋賀県佐和山城の落城を伝える『おあん物語』が有名である。

愛媛県湯築城跡では平山城頂部から16世紀中ごろの小規模な鍛冶遺構が発見されている。分析結果などから城内の生活用具や釘・工具などが製作されたと推測されている。その他、金沢城で幕末の鉄砲鍛冶遺構が、大坂城三の丸跡で徳川期に鏃などをつくった遺構が発見されている。

以上を踏まえ、今回発見遺構を検討した場合、発見地が城郭中枢部分であること、廃棄物を場外に搬出せずそのまま廃棄していること、鍛造作業が大規模で一時に行われたことなどの特殊性を挙げることができる。通常の城郭整備にともなう鉄製品の製作であれば、城下町や他の場所で行うことも出来るし、廃棄物を城外へ運び出すはずである。その全てがなされていない状況を評価すれば、緊急を要する鉄製品製作が推測できる。17世紀初頭は大坂を舞台とした戦乱期でもあり、城郭中枢部で武器・武具を製作していた可能性が十分考えられる。

岸和田城は大坂冬の陣で戦災を免れたものの戦闘は塔まで及び、小出一族は大坂城籠城戦に参加している。また、夏の陣ではついに岸和田城は取り囲まれ、合戦にはいたらなかったが、泉州方面では激戦が繰り広げられた。この様な時季に照らし合わせば、今回発見遺構は大坂の陣に備え、武器・武具を緊急に製作したか、合戦に備え、徳川方の要請を受け、内密に武器などを調達した痕跡とみることも出来る。戦国末期の緊迫した状況が窺える興味深い発見といえよう。

参考文献（T～W章）

- 伊万里市教育委員会『金石原窯址窓跡・焼山上窓跡・焼山上窓跡・市の瀬高窯神室跡』 1988
人情帳「麗聞陶曜」 1993 ニューサイエンス社
大平 茂「近世丹波焼播磨の形式分類と編年」『三田市下野原窯址』 1992
小野正統「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 1982 日本貿易陶磁研究会
岸和田市立郷土資料館『岸和田の歴史』 1995
小浜 成「岸和田城発掘調査概要」T 1997 大阪府教育委員会
柴 晚彦「シミズ谷城跡」「京都府遺跡調査概報」79 1997 京都府埋蔵文化財調査研究センター
白神典之「堺鋸鉄考」「東洋陶磁」19 1992 東洋陶磁学会
小野正統・藤井謙治・守屋毅「統一政権の樹立」「人宮古府史」5 1985 大阪府
玉谷 哲「岸和田城」「日本城郭大系」12 1981 新人物往来社
木谷 哲・福山 哲「中世から近世へ・岸和田城と城下町」「岸和田市史」3 2000 岸和田市
栗岡 実「『樂前鋸鉄の鋼年について』」「第3回中近世備前焼研究会」発表要旨 2000 備前焼研究会
賀 瑞鳳「中国古錢譜」 1989 文物出版社
藤澤良祐他「瀬戸市史」4 1993 爱知県瀬戸市
山中吾朗「だんじり祭で販賣する城下町」「城下町古地図散歩」4 1996 平凡社
横田賢次郎・森田 効「人宮古出土の輸入中國陶磁器について」「九州歴史資料館研究論集」4 1978 九州歴史資料館

表1 岸和田城関連年表

西暦	和暦	城主	事 項	遺構時期
1573	天正元		室町幕府の滅亡。	
1582	天正10		本能寺の変。 山崎の合戦で秀吉が光秀を討つ。 太閤検地の開始。 (各地の荘園が消滅し、大名領国制が確立)	
1583	天正11	中村一氏	秀吉・中村一氏を根来勢への備えとして岸和田城に入る。	
1584	天正12	〃	根来・雜賀衆、岸和田城を攻撃する。	I
1585	天正13	〃	秀吉、紀州攻めのために岸和田城に入城。泉南の根来寺の出城を陥し、根来寺を焼く。この時岸和田城下町も一部焼かれる。	
		小出秀政	中村一氏、近江国水口城に転封し、小出秀政が城主となる。	
1587	天正15	〃	秀政、6千石を加増され1万石となり、城郭整備にかかる。	
1595	文禄4	〃	築城開始。	
1597	慶長2	〃	天守閣完成。	
1598	慶長3	〃	秀吉没。 城郭普請完成。(城下町の成立)	
1600	慶長5	〃	岡ヶ原合戦。 (小出吉政は西軍で、小出秀家は東軍で闘う)	
1604	慶長9	小出吉政	秀政没。但馬国出石城より移転、吉政が城主となる。	
1613	慶長18	小出吉英	吉政没。但馬国出石城より移転、吉英が城主となる。	
1614	慶長19	〃	大坂冬の陣。 (大野治房軍が大坂城から堺まで進軍)	II
1615	元和元	〃	大坂夏の陣。 (大野治房軍が岸和田城を取り囲み本隊は南下、櫻井川の戦いで敗北する)	
1619	元和5	松平康重	小出吉英、但馬国出石城に移転となり、丹波国篠山城の松平康重が城主となる。(城内の荒廃の様子を伝える)	
1640	寛永17	松平康英 岡部宣勝	康重没。康英が城主となる。 松平康英、播磨国山崎城に移転し、摂津高槻城の岡部宣勝が城主となる。以後13代にわたり岡部氏が城主となる。	
1645	正保2	〃	幕府の命によって「和泉国岸和田城絵図」が作成、提出される。 (五層の天守閣、筆頭家老中家の位置などが描かれている)	III
1827	文政10	岡部長慎	岸和田城天守閣、雷火で焼失。	
1871	明治4	岡部長職	廢藩置県。	
1954	昭和29		天守閣再建。	
1996	平成8		大阪府教育委員会 岸和田城の第1次調査 (外堀ほか確認)	
2001	平成13		大阪府教育委員会 岸和田城の第2次調査	

付載1 岸和田藩筆頭家老中家の系譜

山中吾朗(岸和田市教育委員会郷土史資料室)

今次の発掘調査地は、平成8年度調査地と同じく、江戸時代には岸和田藩筆頭家老中家の屋敷が存在したと推定されている区域にあたる。中家は、江戸時代を通じて、岸和田藩の筆頭家老職を代々勤め、その禄高は1500石であった。次席家老久野家が1300石を与えられたが、その次の高禄者は550石であり、中家は久野家とともに、家臣の中では一頭抜けた高禄を給せられていた。

こうした理由で、筆者は調査担当者とともに岸和田市下松町在住の川村(中)登美子氏宅を訪問し、中家伝来資料を調査させていただいた。藩政資料等は散逸してしまったようだが、中家系譜資料4点と、元文4(1739)年、藩主岡部長富(長著)が葛城山頂の高麗神社(八大竜王社)に奉納した石鳥居銘の写し1点が伝えられていた(図版10d)。これらのうち、葛城山頂の鳥居の銘文が中家に伝わるのは、正保2(1645)年に中次俊が同社の石祠を寄進した由緒によると思われる(岸和田市教育委員会『葛城峰宝仙山萬覚書』)。それ以外はいずれも中家の系譜資料であるが、これまで不明であった歴代筆頭家老の実名が確かめられ、その出自も一定程度明らかにすることができた。以下、これらの資料によって中家の系譜をたどることにする。

中家系図は2本伝わる。1本(系図Aとする)は藤原鎌足から、寛延2(1749)年に没した中頼恒までの系図で、楷書で丁寧に記されたものである(図版9)。もう1本(系図Bとする)は、戦国期の頼郷から頼業(幕末頃の人物と思われる)までを記し、文字はややくずした草書体で、人名を結ぶ朱線もフリーハンドで引かれているなど系図Aに比べて粗雑で、草稿と思われる(図版10a～c)。しかし、系図Bは幕末期まで記載されているので、系図A以後の人名が知れる。A・Bを比較すると、人名に若干の異同もある。系図A・Bの成立年代は、ともに全巻通じて同筆で記されており、後筆は認められないで、およよそ各系図の最後に記された人物が生存した時期と考

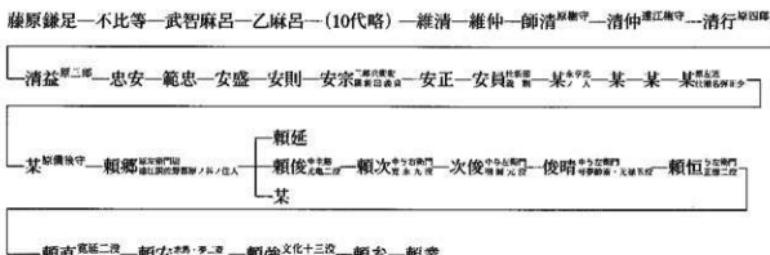


図25 由来系図

えてよいだろう。すなわち系図Aは江戸中期(18世紀前半頃)、Bは幕末期頃の成立と推測される。料紙や書風もそのように考えて特に違和感がない。系図の他に、繩豊期～江戸初期の中頼次とその子次俊の事績を記した「覚」1通と、「御先祖御法号」と表紙に記された法名書(横半帳)1冊がある。「覚」の内容は頼次については系図Aの頼次の個所にほぼ同内容が記されているが、次俊(Aでは俊次となっている)については系図にその事績についての記載がない。「御先祖御法号」は戦国末期の頼郷から頼強(文化13<1816>年没)までの各代、および妻子の法名や没年を記す。このように「覚」・「御先祖御法号」は系図の内容を補ってくれる。図25は、これらの史料によって作成した略系図である。

中家は、南家藤原氏の一流(工藤流)で、もと遠江国原村を本貫として原氏を称し、南北朝期には新田義貞、同義則に仕え、室町・戦国期には、原左近が今川家臣瀬名氏に仕えたという。

遠江国原村は、「和名抄」にみえる佐野郡輔羅郷のこと、現在の静岡県掛川市の北西部に位置する。中世の原氏は、法金剛院領(後、最勝光院領、鎌倉末期以後は東寺領)原田荘の地頭職に任じられ、原田荘の有力な在地領主であった。一族は、寺田・孕石・向立・天方氏など原田荘およびその周辺を名字の地とする諸家に分かれ、室町期には遠江国中部の国人衆の中心的存在であった(『静岡県の地名』平凡社)。原氏は応仁・文明の乱前後の時期には、遠江国が斯波氏領國であったにもかかわらず今川氏に属していたが、15世紀末、今川氏が遠江へ勢力を伸ばし始めると反今川氏の立場をとった。原氏の拠った殿谷城(掛川市本郷)は、明応3(1494)年に今川軍の先鋒であった北条早雲に攻め落とされ、以後、原氏は没落したという(『掛川市史 上巻』)。

さて、系図Aの範忠までの記載は、「尊卑分脈」の記載と一致している。これまで原氏系図は①掛川市春林院所蔵「原氏系譜」(明治期)、②神戸市孕石家所蔵「原・孕石系図」(天文12年)、③小山町孕石家所蔵「孕石氏系図」(江戸中期)の3種が確認されている(『静岡県史 通史編2 中世』)。①は範忠までは「尊卑分脈」および中家系図と同じで、範忠の子を忠泰とし、以後6代を経て、頼郷・頼延へと続く。②は①で範忠の子とされる忠泰以後の系図であるが、頼郷・頼延までの人の名は①ともかなり異なっている。③は南家藤原氏二階堂流とし、忠泰以下は②と同じである。このように、中家系図は、範忠までは、「尊卑分脈」を寫したとも考えられるが、それ以後はこれまで知られているどの原氏系図とも異なり、戦国期の頼郷・頼延で再び一致する。おそらく、これらの諸種の原氏系図は、範忠までは「尊卑分脈」に基づいて作成され、以後は分立した諸家が、各々惣領家に結びつくようになされた系図を見るべきであろう。戦国期の頼郷・頼延が諸本で一致するのは、この二人が戦国期に紛れもなく実在したためと考えられる。

頼郷は、「御先祖御法号」によれば、遠州原野谷の高富士(高藤=殿谷)城主で、約18万石を領し、春窓比丘尼の菩提所として同所に春林院を建立した旨が記載されている。果たして頼郷が高藤城主であったのか、またその石高表記についても疑問が残るが、春林院は掛川市吉岡に現存する曹洞宗寺院で、天文4(1535)年に原頼郷が一族の春窓尼菩提のために建立したと伝えられる。

春林院には、天文23年2月5日付で頼郷が春林院に寺地を寄進した寄進状などの史料が伝わ

り、原頼郷の実在は確実である。また、同院には永禄13年3月2日付で原頼延が春林院の寺領を安堵した文書も伝わり、頼延も実在した人物である。中家は頼延の弟頼俊の系統とされている。

中家系図によれば、頼郷の次男(系図Bでは頼延の子)頼俊は武勇に優れ、次男であるために「中殿」と呼ばれたことによって、以後、中氏を称するようになったという。中氏が岡部家臣となるのは、頼俊の子頼次の時からで、頼次は、永禄11(1570)年、14歳の時に岡部正綱に仕え、以後、天正10(1582)年織田・徳川軍による甲州攻め、同12年長久手合戦などで岡部正綱や長盛配下の武将として功名をあげた。岡部正綱は、永禄3年桶狭間合戦で今川義元が討たれて以後、斜陽化した今川家にあって最後まで今川家に忠節を尽くし、永禄11年武田信玄によって駿府城を攻撃された際も、奮闘する正綱に感心した信玄が、正綱を家臣に取り立てようと和睦を申し出たという。この武田氏による駿府城攻撃の時に、頼次は岡部家臣となったという。その後、岡部氏は武田家臣となり、武田氏も、勝頼の代に織田・徳川軍の攻撃を受け、天正10年に滅亡する。次いで岡部氏は徳川家康の家臣となり、やがて近世譜代大名に成長する端緒を築いた(岸和田市立郷土資料館特別展図録「戦国武将岡部一族」参照)。

原氏はすでに述べたように、明応3年の北条早雲による遠江侵攻以後没落したとされているが、天文年間にはまだ春林院を建立しうる程度の勢力は維持していた。しかし、永禄3年3月16日今川義元判物(沼津市妙泉寺所蔵春林院文書)・同年9月21日今川氏真朱印状(春林院文書)等によれば、原頼郷は春林院からの借銭の返済が滞り、その猶予を今川義元・氏真に願い出たが、許されなかった。返済滞納の理由は頼郷の「困窮」のためという。結果、質入れした田地は春林院の所有となったようである。永禄期には原氏は借銭の返済がままならない状態にあった。原氏はすでに経済的に自立しない状況にあったのである。こうした状況が、原氏から分立した中氏の岡部家臣化の一因であったとするならば、岡部家臣となった時期を永禄11年とする中家系譜の記載は、十分に蓋然性をもつるものであろう。

ところで、岡部氏は、もと駿河国志太郡岡部郷(現、静岡県志太郡岡部町)を本貫とする鎌倉幕府御家人で、室町・戦国期には駿河・遠江・三河国守護今川氏の被官となった。やはり南家藤原氏の一流で、系図の上では中氏と祖先を同じくする。中家が後に岸和田藩筆頭家老として厚遇さ



図26 岡部・原・久野氏略系図(『尊卑分脈』より)

れる理由もこのあたりにあるのかもしれない。ちなみに、次席家老久野氏については、「岸和田藩岡部家御代々御家人帳」(鬼洞文庫蔵、「和泉志」2号、以後「御家人帳」と略記する)によれば、久野覺之助は、もと今川家臣朝比奈駿河守(信置か)の家臣で、朝比奈家が断絶したために、岡部長盛が丹波国福知山城主であった時期に岡部家に客人分として召抱えられたというので、久野氏も今川家中に出自をもつ。今川家臣団の中に遠江国久野城(袋井市鷺巣)城主久野氏があり、岸和田の久野家は久野城主の一族であったと思われるが、『尊卑分脈』によれば久野氏も南家藤原氏の流れを汲む一族であった(図26)。すなわち、岸和田藩筆頭家老と次席家老は、ともに系図の上では藩主と同族であったということになる。

さて、岡部家と中家との主従関係は、系図Aでは永禄11年以後一貫して岡部家臣であったよう記すが、系図Bの頼次の項に「永禄年中始テ岡部正綱公ニ仕、子細有テ鳥井左京進殿へ退去ス、乍去主恩ヲ忘ニ不忍、一子主膳次俊ヲ残シ置」とあり、頼次は後に鳥居忠政に仕え、子次俊は岡部家に残されたという。一方、「御家人帳」によれば、中氏は本来、徳川家康の重臣鳥居元忠の家臣であったが、一時期岡部長盛の家臣となり、更に長盛が丹波亀山城主の時に鳥居家へ帰参し、その後再び岡部家臣となったというので、中氏が一時期、鳥居家に仕えたことは事実のよう

である。長盛が亀山城主であったのは慶長14(1609)年8月から元和7(1621)年8月までであるから、「御家人帳」の記載が正確なものだとすれば、大坂の陣前後の時期に中氏は岡部家臣→鳥居家臣→岡部家臣と主家を移動したことになる。一方、中家の「覚」では中次俊は大坂冬の陣(慶長19年)の折には岡部宣勝の御供として天溝口に在陣したという。これらの記述がともに事実であるとするならば、慶長14年8月以後に鳥居家臣となった中氏は、慶長19年までに岡部家に帰参していたということになるが、なぜこのような複雑な経緯をたどったのか、不明である。ただし、その後の岸和田藩での筆頭家老という厚遇を考慮すれば、鳥居家への一時帰参は決して主君岡部氏の意に反する行動ではなかったであろうと推測される。

こうして次俊以後、中家は代々岸和田藩筆頭家老を勤め、岸和田城本丸内の一画に広大な屋敷地を構えるようになった。

(追記)本稿執筆にあたり、藤枝市郷土博物館学芸員磯部武男氏より資料提供などの便宜を図っていただいた。末尾ながら御礼申し上げる。

付載2 唐津焼の年代観

—岸和田城鉄造土坑Ⅱ b-1 出土資料をめぐって—

渡辺晴香（本府調査員）

鐵造土坑Ⅱ b-1 は文献に記された城郭の変遷や発見遺物などから、報告書本文で 1598～1620 年頃の年代を導いた（本文図 17～20）。本論は発見資料の内、唐津焼鉄絵溝縁皿（本文図 19・45）をとりあげ、問題点と年代観を整理・検討し、編年研究の一助としたい。

注目する唐津焼皿の形態的特徴は体部を 2 か所で屈曲させ、口縁部は外反して端部を溝状にする。この皿は胎上目技法によって焼成されているが、その形態的特徴は砂目積みの皿を模倣している。つまり、砂目積み段階に、一段階古い胎土目積みが存続した地域で焼かれたものである。

唐津焼皿は胎土目積み段階に丸皿・折縁皿が、砂目積み段階に溝縁皿が中心に生産される。問題の皿は窯跡群の辺縁に位置する武雄市周辺の窯で類例が発見されており、製作年代は砂目積み技法を取り入れる年代観によって 1610 年～30 年頃と考えられている（註 1）。

しかし、広域に多数の窯が存在する唐津焼にあって、製品の形態や技法で段階的な型式変遷を語れるとは限らず、多様な変化がみられるようだ。年代の限定にはいたらない。

一方、大量消費地である大坂城下町で該当期に位置づけられる資料には大坂夏の陣の焼土層包含遺物（OS 83-15 第 4 層など）と、魚市場移転に伴う廃棄土坑・括遺物（AZ 87-5 SX 201）などがある（註 2）。大坂夏の陣は 1615 年である。魚市場は夏の陣以降に開設され、1622 年に移転するものの、夏の陣以前から使われていた陶磁器を含む可能性もある。

前者の包含資料からは砂目積み段階の溝縁皿がごく少量発見される。後者の土坑遺物からは砂目積み溝縁皿が増え、さらにそれ以降の時期の構造からは急激に増加し、肥前磁器が出現するようになる。したがって、問題の皿の流通の中心は後者、土坑資料の時期に求められる。

鐵造土坑Ⅱ b-1 からは問題の皿以外にも唐津焼小皿・碗・鉢・備前焼・丹波焼播鉢・瀬戸焼小皿などが発見されており、砂目積みの唐津焼や肥前磁器はなかった。これらの遺物もおおよそ 1610 年代の年代を与えることができ、齟齬をきたさない。

以上より、問題の皿は消費地での出現段階を示す資料として注目できる。ただし、消費遺跡の年代観は漸次的な変化が認められ、組成の変化から新旧を求めることが有効である。今回出土の陶磁器は器種や点数が限られ、残念ながら組成から年代観をより限定できるものではなかった。

最後に、関連出土資料については府教委の方々はじめ、大阪市文化財協会・堺市埋蔵文化財センター諸氏から有益なご意見を頂いた。また、生産地の状況について、村上伸之氏（有田町歴史民族資料館）から貴重なご意見、ご指導を頂いた。末筆ながら、記して謝辞いたします。

（註 1）村上伸之『研究紀要』6 1997 有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館

九州近世陶磁学会 『九州陶磁の編年』 2002

（註 2）森 毅 「大坂出土の 16・17 世紀の陶磁器」『東洋陶磁』26 1997 東洋陶磁学会

表2 実測遺物登録対照表1

擇図番号	図版番号	実測番号	器種	出土遺構	遺存度合
図 10 - 1		56	椀	機械掘削	小片
2		55	椀	上層整地土層	小片
3		69	椀	上げ土	小片
4		50	椀	溝Ⅲ-2	口縁1/3
5		52	杯蓋	土坑Ⅱ-29	1/4
6		51	杯	土坑Ⅲ-1	小片
図 11 - 7	11	7	碗	土坑Ⅰ-1	完形復元
8		53	香炉	整地層Ⅰ-1	小片
9		106	羽釜	土坑Ⅰ-1	小片
10		92	火鉢	土坑Ⅰ-1	小片
11		91	鉢	土坑Ⅰ-1	小片
12	11	89	壺	土坑Ⅰ-1	口縁3/4
13		124	平瓦	土坑Ⅰ-2	1/2
14	11	74	甕	土坑Ⅰ-1	小片
15	11	17	甕	土坑Ⅰ-1	破片多數
16	11	18	甕	土坑Ⅰ-1	破片多數
図 12 - 17	11	23	擂鉢	上層整地層	完形復元
図 13 - 18		115	甕	土坑Ⅰ-2	1/3
19	11	18	甕	土坑Ⅰ-4	完形復元
図 14 - 20	11	104	皿	焼土遺構Ⅱa-1	小片
21	11	57	皿	溝Ⅱa-1	小片
22	11	42	皿	溝Ⅱa-1	口縁欠損
23	11	44	軒丸瓦	機械掘削	小片
24	11	43	軒丸瓦	上層整地層	小片
25		103	平瓦	焼土遺構Ⅱa-1	ほぼ完形
図 18 - 26	12a	67	羽口	鍛造土坑Ⅱb-1	破片
27	12a	65	羽口	鍛造土坑Ⅱb-1	破片
28	12a	64	羽口	鍛造土坑Ⅱb-1	基部欠損
29	12a	66	羽口	鍛造土坑Ⅱb-1	基部欠損
30	12a	61	羽口	鍛造土坑Ⅱb-1	基部欠損
31	12a	62	羽口	鍛造土坑Ⅱb-1	基部欠損
32	12b	135	鉄カス	鍛造土坑Ⅱb-1	完形
33	12b	136	鉄カス	鍛造土坑Ⅱb-1	完形
34	12b	139	鉄カス	鍛造土坑Ⅱb-1	完形
35	12b	138	鉄カス	鍛造土坑Ⅱb-1	完形
36	12b	134	鉄カス	鍛造土坑Ⅱb-1	完形
37	12b	137	鉄カス	鍛造土坑Ⅱb-1	完形
図 19 - 38	13c	4	灯明皿	鍛造土坑Ⅱb-1	完形復元
39	13c	6	皿	鍛造土坑Ⅱb-1	完形復元
40	13c	5	灯明皿	鍛造土坑Ⅱb-1	完形復元
41		54	皿	鍛造土坑Ⅱb-1	小片
42	13c	8	皿	鍛造土坑Ⅱb-1	完形復元
43	13c	1	皿	鍛造土坑Ⅱb-1	完形
44	13c	21	碗	鍛造土坑Ⅱb-1	完形復元
45	13c	2	皿	鍛造土坑Ⅱb-1	完形復元
46		3	鉢	鍛造土坑Ⅱb-1	1/6
47		80	瓶	鍛造土坑Ⅱb-1	小片
48	13	88	擂鉢	鍛造土坑Ⅱb-1	小片
49	13	72	擂鉢	鍛造土坑Ⅱb-1	小片
50	13	20	擂鉢	鍛造土坑Ⅱb-1	1/8
51	13	114	擂鉢	鍛造土坑Ⅱb-1	小片
52	13	86	擂鉢	鍛造土坑Ⅱb-1	小片
53	13	87	擂鉢	鍛造土坑Ⅱb-1	小片
図 20 - 54		45	軒平瓦	鍛造土坑Ⅱb-1	小片
55	13	123	軒丸瓦	鍛造土坑Ⅱb-1	小片
56	13	118	軒丸瓦	鍛造土坑Ⅱb-1	1/4

表3 実測遺物登録対照表2

掲出番号	図版番号	実測番号	器種	出土遺構	遺存度合	
	57	13	軒丸瓦	鍛造土坑II b - 1	1 / 5	
図 19 - 58		116	軒丸瓦	鍛造土坑II b - 1	1 / 3	
	59	13	丸瓦	鍛造土坑II b - 1	完形復元	
図 22 - 60		129	段蓋	土坑III - 1	小片	
	61	109	皿	土坑III - 1	小片	
	62	81	皿	灰褐色土層	小片	
	63	14.15d	小环	土坑III - 1	完形復元	
	64	14.15d	28	紅皿	土坑III - 1	完形復元
	65	108	仏巖器	土坑III - 1	脚部欠損	
	66	96	碗	土坑III - 1	小片	
	67	110	碗	土坑III - 1	小片	
	68	68	碗	井戸III - 1	口縁1 / 2	
	69	14.15d	95	碗	機械掘削	完形復元
	70	97	猪口	土坑III - 1	1 / 4	
	71	14.15d	11	碗	土坑III - 1	完形復元
	72	14.15d	29	碗	土坑III - 1	完形復元
	73	14.15d	25	鉢	土坑III - 1	完形復元
	74	14.15d	13	碗蓋	上層整地土層	完形復元
	75	98	皿	土坑III - 1	小片	
	76	85	皿	表土	1 / 4	
	77	14.15d	16	皿	土坑III - 1	完形復元
	78	14.15d	22	皿	土坑III - 1	完形復元
図 23 - 79	14.15d	19	碗	機械掘削	口縁1 / 5	
	80	14.15d	10	碗	土坑III - 1	完形復元
	81	113	碗	土坑III - 1	口縁欠損	
	82	100	鉢	土坑III - 1	高台1 / 4	
	83	14.15d	24	鍋	土坑III - 1	完形復元
	84	15d	27	德利	土坑III - 1	口縁部直下まで復元
	85	15d	31	土瓶蓋	土坑III - 1	完形復元
	86	15d	132	土瓶蓋	土坑III - 1	完形復元
	87	14.15d	30	土瓶	土坑III - 1	完形復元
	88		125	鍋	土坑III - 1	小片
	89		126	楕木鉢	土坑III - 1	小片
	90		133	擂鉢	土坑III - 1	小片
	91	15.15d	91	擂鉢	土坑III - 1	完形復元
図 24 - 92		26	灯明皿	土坑III - 1	小片	
	93	15d	107	灯明皿	土坑III - 1	小片
	94		128	灯明皿	土坑III - 1	小片
	95		82	焼塙壺蓋	上層整地土層	1 / 4
	96		130	皿	土坑III - 1	小片
	97		127	灯明皿	土坑III - 1	小片
	98		84	焼塙壺	土坑III - 1	小片
	99	14.15d	32	焼塙壺	土坑III - 1	完形
	100		83	焰烙	土坑III - 1	小片
	101		94	焰烙	土坑III - 1	小片
	102		101	面子	土坑III - 1	完形復元
	103		112	火鉢	土坑III - 1	小片
	104	15	35	軒丸瓦	土坑III - 1	小片
	105	15	38	軒丸瓦	土坑III - 1	小片
	106	15	39	軒丸瓦	土坑III - 1	小片
	107		46	軒平瓦	壊乱	小片
	108	15	33	軒平瓦	土坑III - 1	小片
	109		40	丸瓦	土坑III - 1	小片
	110		37	棟端瓦	土坑III - 1	小片
	111		36	道具瓦	土坑III - 1	小片

報告書抄録

ふりがな	きしわだじょうあと
書名	岸和田城跡
副書名	東の丸の調査
巻次数	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2001-5
編集著者名	西川寿勝・渡辺晴香・山中吾朗
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351 (代表)
発行年月日	2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きしわだじょうあと 岸和田城跡	おおさかふきしわだし 大阪府岸和田市	27202	114	34,	135,	01年3月から	合計 300m ²	府立岸和田高等学 校建て替 えに伴う 調査
	きしきちょう 岸城町			27,	22,	02年3月末まで		
15	20							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
きしわだじょうあと 岸和田城跡	近世城郭	戦国時代	鍛造土坑 焼土を伴う溝 整地層・土坑	鉄カス・炭 フイゴ羽口 陶磁器・灯明皿 陶磁器	大坂の陣前後の 鉄製品製造跡

大阪府埋蔵文化財調査報告案内（13年度）

2001-1 招提中町遺跡

- 2 余部遺跡 I
- 3 梶遺跡
- 4 碓之上十ノ坪遺跡
- * 5 岸和田城跡
- 6 跡部遺跡
- 7 神田北遺跡
- 8 讀良郡条里遺跡

図 版



井戸Ⅲ-1の井戸枠展開状況



a. 再建された天守閣（西から）



b. 天守閣より調査区を望む
(左の森は岸城神社)

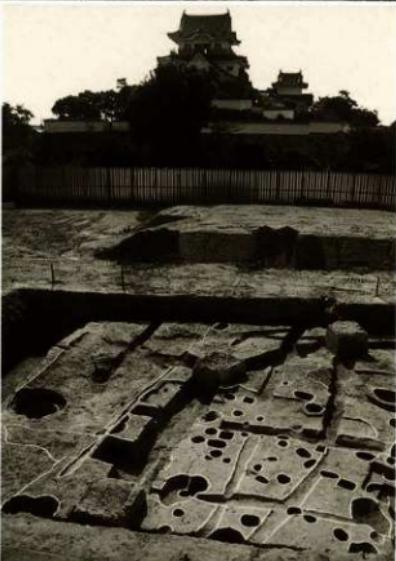
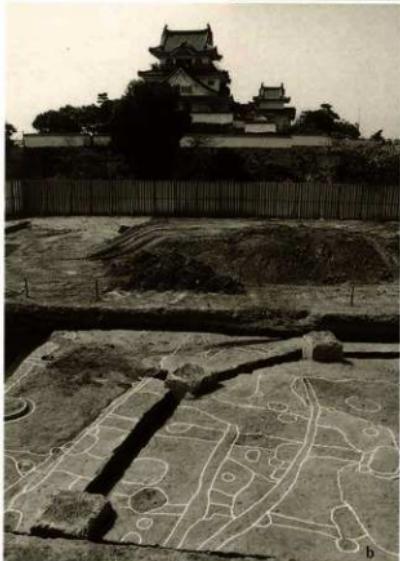


c. 現地説明会風景 (6/9)



d. 高校関係者見学会 (6/12)

- a. 調査区より本丸をのぞむ（東から）
- b. 遺構検出状況（東から）
- c. 同上掘削状況
- d. 遺構検出状況（南から）
- e. 同上掘削状況





a. 調査区と本丸（東から）



b. 同上掘削状況



c. 造構検出状況（東から）



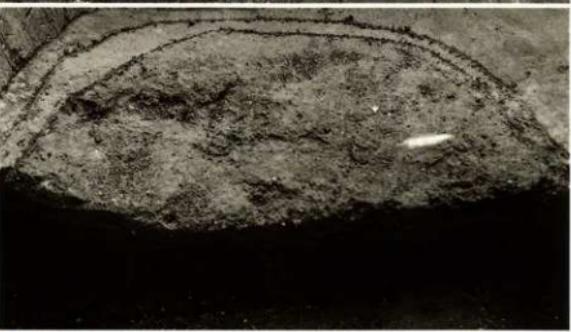
d. 同上掘削状況



a. 土坑I-4 壺発見状況（南から）



b. 土坑I-2 壺発見状況（北から）



c. 土坑I-3 曲物痕跡（北から）



d. 井戸III-1（東から）



a. 溝II a-1・II a-2 (南から)



b. 溝II a-1 に堆積した焼土 (北から)



c. 溝II a-1 に堆積した焼土・磁器
(南から)



d. 造構面下層の自然河川 (北から)



a. 錫造土坑Ⅱb-1発見状況（東から）



b. 同上堆積状況（東から）



c. 同上（南から）



d. 同上（西から）



a. 大溝II b-1 棚出状況（南から）



b. 同上掘削状況



c. 焼土造構II a-1（北から）



d. 同上掘削状況



a. 銀造土坑 II b-1 炭層堆積状況（東から）



b. 同上（北から）



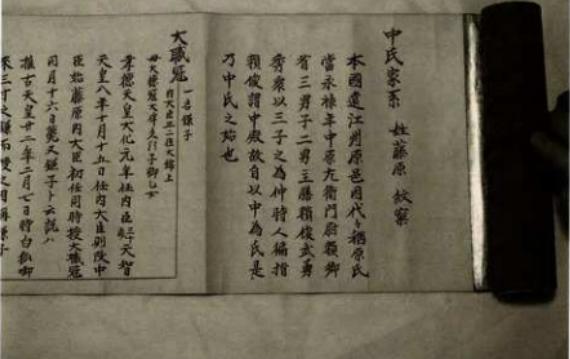
c. 同上完掘状況（南から）



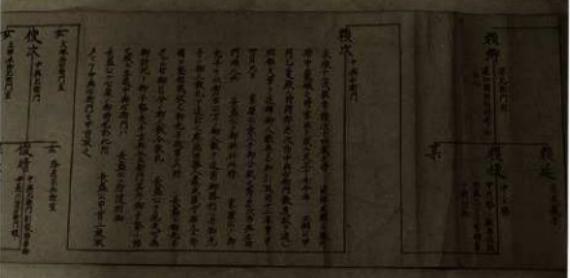
d. 同上（西から）



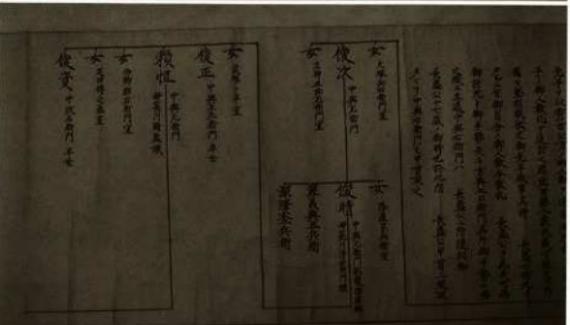
a. 中家所藏系図 (A)



b. 同上卷頭



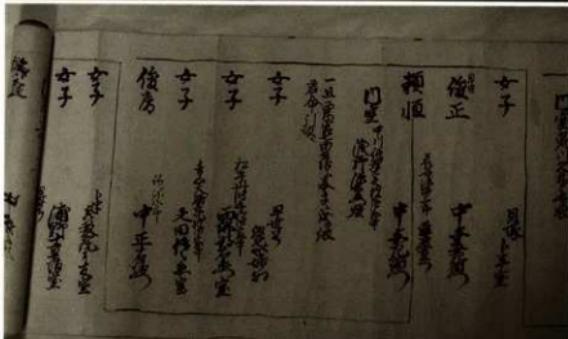
c. 同上類次事績部分



d. 同上卷末 (賴恒沒年 1712 年)



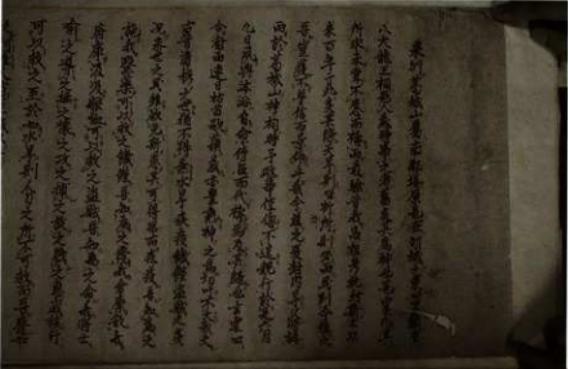
a. 中家所藏系図 (B) 卷頭



b. 同上



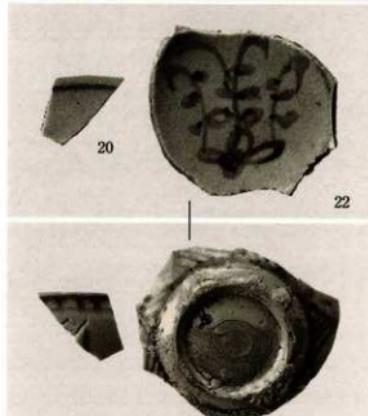
c. 同上卷末



d. 墓城山頂石鳥居銘の写し



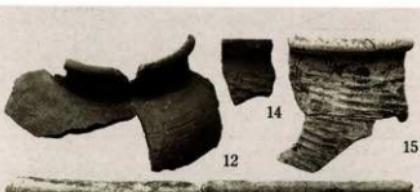
7



20



22



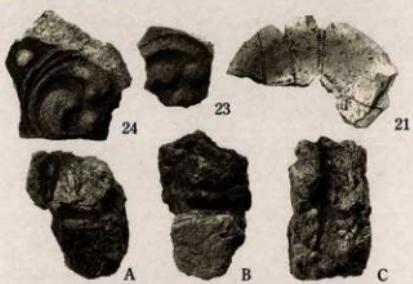
12

14

15



16



24

23

21

A

B

C

(A～Cは焼けた埴土)



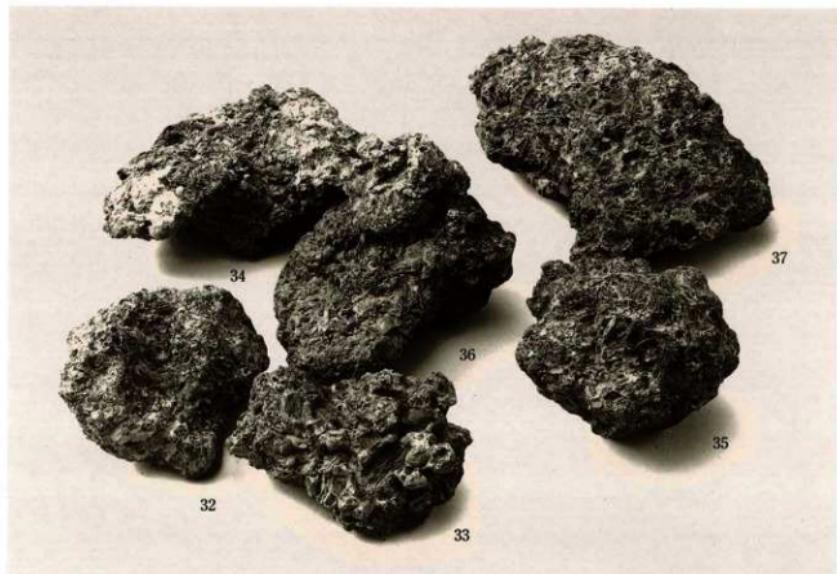
17



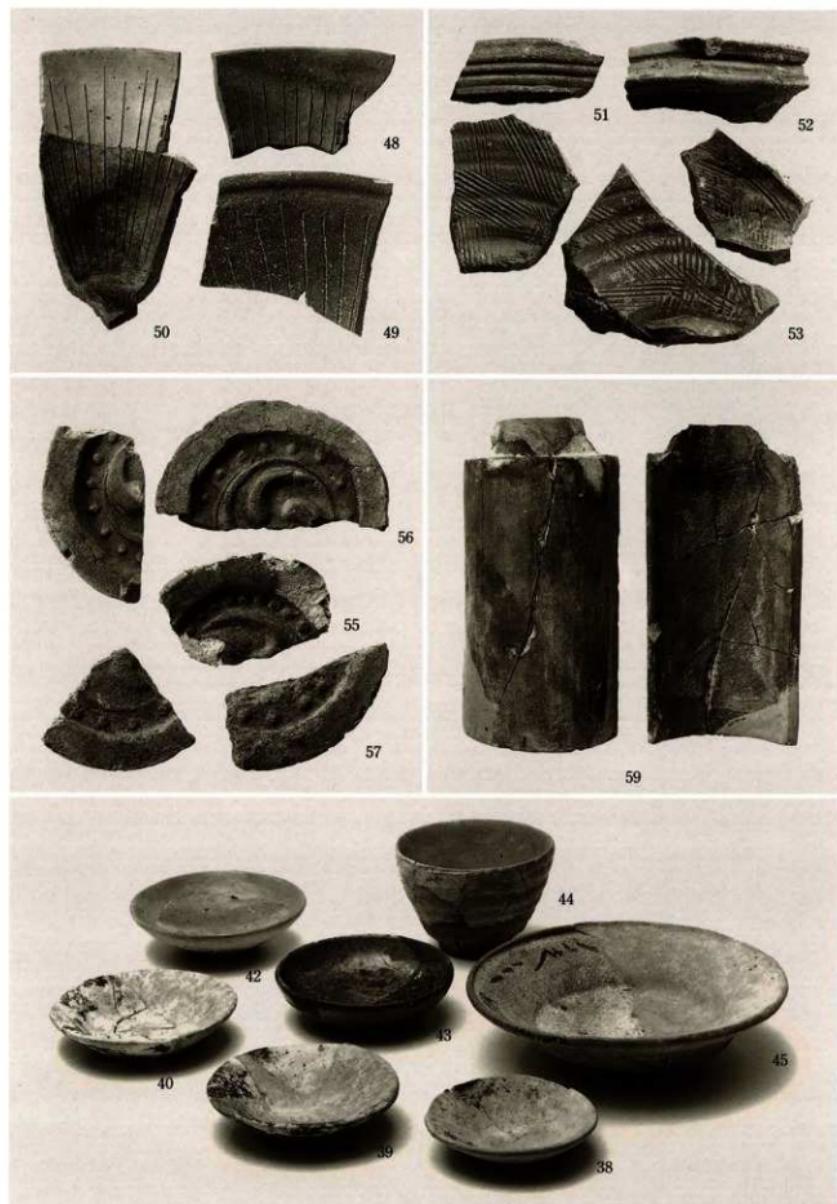
19



a. 錫造土坑 II b-1 出土 フイゴ羽口



b. 錫造土坑 II b-1 出土 鉄カス



c. 銅造土坑 II b-1 出土唐津燒・土師質土器





d. 土坑III-1出土陶磁器

大阪府埋蔵文化財調査報告 2001-5

岸 和田 城 跡

—東の二の丸の調査—

発 行	大阪府教育委員会 〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351 (代)
発行日	2002年3月29日
印 刷	鳳浦印刷(株) 門真市柳田町3番2号 TEL 06-6902-7201 (代)

